

JTF JOURNAL



2016

07/08 #284

翻訳の未来を考える

巻頭特集

LocWorld30 Tokyo



お客様のご要望に応えるため
更なるベストサービスを目指しています。

プロジェクトチームに 参加しませんか？

在宅・オンサイト
翻訳者募集中！

IT関連 半導体関連 化学分析 金融

医療・医薬・医療機器 マーケティング・ビジネス関連



Communication for
a global marketplace



株式会社 十印（とおいん）

〒141-0031 東京都品川区西五反田7丁目25番5号 オーク五反田ビル

TEL 03-5759-4371（採用担当窓口まで）<http://www.to-in.com>（「お問い合わせ」）

募集中!

営業、コーディネータ、
校正スタッフなど、多くの人材を
各拠点で募集しております!

言語 英語・中国語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語・ロシア語
韓国語 等(その他言語も募集中)

分野 特許・工業・医薬・金融・ローカライゼーション

内容 翻訳者・校正者・メディカルライター・通訳者・ワープロ外注
オペレーター 等

応募方法 下記ウェブサイトからご応募下さい

株式会社 翻訳センター JASDAQ
証券コード: 2483

大阪 大阪市中央区久太郎町4丁目1番3号 大阪御堂筋ビル13階
TEL: 06-6282-5010 E-Mail: info@honyakuctr.co.jp

東京 東京都港区三田3丁目13番12号 三田MTビル8階
TEL: 03-6369-9965 E-Mail: freelance@honyakuctr.co.jp

名古屋 名古屋市中村区名駅3丁目16番4号 太陽生命名駅ビル5階
TEL: 052-571-2101 E-Mail: nagoya@honyakuctr.co.jp



医薬翻訳
Medical



工業翻訳
Industry



Financial
金融翻訳



HONYAKU
CENTER
New Standards in Translation
株式会社 翻訳センター



Patent
特許翻訳



募集要項・会社概要等、詳しくはウェブサイトをご覧ください <http://www.honyakuctr.com/>

産業翻訳の
新たなカタチ、
構築中...

「英語が好き」を仕事にしたい。わたしの夢を、ここでかなえる。

通学科／通信科講座、
ワンデーセミナーなど
多彩なプログラムをご用意。
「翻訳実務検定TQE」を運営し、
翻訳者の育成に力を入れています。

未来の翻訳者が集う場所
SUNFLARE Academy
サン・フレアアカデミー

お問い合わせ

☎03-6675-3965

受付時間 / 平日 10:00～20:00 土曜日 10:00～17:00

詳しくはウェブサイトで

サンフレアアカデミー

検索



Chizai
Corporation

言葉をインフラに、世界の知財をつなぐ 私たちは知財のプロフェッショナルです

業務内容

- ◎ 特許翻訳【英語・中国語・韓国語・欧州アジア各国言語】
- ◎ 知財アカデミー®【教育・情報提供】
- ◎ 知財ヒューマンリソースズ®【人材派遣・人材紹介】
- ◎ 国内／海外出願用図面作成【特許・意匠】
- ◎ 海外出願事務代行サービス、海外特許調査
- ◎ 中国知財裁判情報提供

フリーランス特許翻訳者常時募集中！

※応募方法など詳細は www.chizai.jp へアクセスください。

海外拠点

＊中国現地法人
知財信息咨询(上海)有限公司
www.chizai.com.cn

＊共同出資会社
雅訳諮詢(大連)有限公司
www.asia-translate.com

株式会社 知財コーポレーション (創立1976年)

〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-10-1 日土地西新宿ビル7階

TEL: (03)5909-1181(代) FAX: (03)5909-1183

www.chizai.jp E-mail: info@chizai.jp ISO9001:2008認証取得

2016年12月、
創立40周年を迎えます



巻頭特集: LocWorld30 Tokyo

- 6 LocWorld30 Tokyo ● 河野 弘毅
- 7 イベント報告 ● 目次 由美子
- 9 LocWorld30 Tokyoへの軌跡 ～株式会社 十印のおもてなし～

連載記事

- 12 続・翻訳者のための作戦会議室 第2回 ● 深井 裕美子
- 14 メディカル翻訳最前線
ランダム化比較試験報告のグローバルスタンダード ● 橘 尚子
- 16 いまさらながらの・・・CATツール★超基本
第2回 翻訳メモリってどんなもの? ● 加藤 じゅんこ
- 18 帽子屋の辞典十夜 第2回「ホーンビー博士のOALD」 ● 高橋 聡
- 20 『何でも教えてキカク』 ISO17100の審査の概要と流れ ● 田嶋 奈々
- 22 翻訳品質のランチボックス 翻訳の「品質」とは(2) ● 西野 竜太郎
- 24 翻訳者のためのWord再入門 Wordをチューニングする ● 新田 順也
- 26 機械翻訳の近未来 第2回xmlとワード文書(リッチテキスト) ● 本間 奨
- 28 翻訳と私 わたしを導いたもの ● 斎藤 静代
- 30 翻訳テクノロジーを学ぶ ～翻訳メモリ編 その1～ ● 立見 みどり

JTF <ほんやく検定>

- 32 第64回JTF <ほんやく検定>合格者発表
- 34 第64回JTF <ほんやく検定>1・2級合格者プロフィール

36 翻訳業界インデックス



表紙撮影: 世良武史

JTF JOURNAL

日本翻訳ジャーナル
2016年7月/8月号 #284
発行人 ● 東 郁男(会長)
編集人 ● 河野 弘毅



一般社団法人 日本翻訳連盟
〒104-0031
東京都中央区京橋 3-9-2 宝国ビル 7F
TEL 03-6228-6607 FAX 03-6228-6604
info@jtf.jp http://www.jtf.jp/

無断転用禁止 ©2016 Japan Translation Federation



巻頭 特集

LocWorld30 Tokyo

翻訳業界が世界にひろがっていることを頭では理解していても、実際に目に見える形でそれを実感できる機会はなかなかありません。毎年、アジア・欧州・北米の三つの地域で開催されるLocWorldは、世界から翻訳業界人が集まるイベントとして確実に存在感と重要性を増してきました。

今年の年末までに開催される32回のLocWorldを開催地別に集計してみると、北米については14回開催のうちシアトル5回・シリコンバレー4回と開催地が定番化してきている一方で、欧州とアジアは過去7年間に限るとダブリンで2回開催されたのを例外として毎回開催地を変えています。

運営側としてはより多くの参加者が集まる都市で開催したいわけで、LocWorldの開催地に繰り返し選ばれることは、ローカライゼーション翻訳の顧客企業や翻訳会社にとってその都市がどれだけ魅力的かを示すひとつの指標になると考えることができるでしょう。アジアにおける日本の翻訳業界の競争力を将来にむけて高めていく上で、LocWorldが今後も日本で繰り返し開催されることには大きな意味と価値があります。

日本には世界で競争できる商品力を持つ産業がたくさんあります。LocWorldに参加する翻訳業界各社はビジネスチャンスがあると考えれば日本での開催を歓迎するでしょうし、世界から多くの翻訳会社に参加してくれば日本の顧客企業にとっても魅力あるイベントとして認知されていくでしょう。そうなれば、いま日本には存在していない翻訳クライアントの大企業が多数参加するイベントが実現できることになり、日本国内の翻訳会社にとってもきっと大きな刺激と成長の機会になるはずです。

今年のLocWorld30 Tokyoを見逃した方も、ぜひ次回の日本開催には発表者や出展者として参加し、世界の業界関係者と交流するネットワーキングの醍醐味を味わっていただきたいと思います。この特集記事がそのきっかけになればさいわいです（河野）



いつもと様子が違う翻訳会社
の展示ブース、準備は万端

Event Report

イベント報告

LocWorld 開催地

		北米	欧州	アジア
LocWorld01	Seattle 2003	○		
LocWorld02	Bonn 2004		○	
LocWorld03	San Francisco 2004	○		
LocWorld04	Bonn 2005		○	
LocWorld05	Seattle 2005	○		
LocWorld06	Barcelona 2006		○	
LocWorld07	Montreal 2006	○		
LocWorld08	Shanghai 2007			○
LocWorld09	Berlin 2007		○	
LocWorld10	Seattle 2007	○		
LocWorld11	Berlin 2008		○	
LocWorld12	Madison 2008	○		
LocWorld13	Berlin 2009		○	
LocWorld14	Silicon Valley 2009	○		
LocWorld15	Berlin 2010		○	
LocWorld16	Seattle 2010	○		
LocWorld17	Barcelona 2011		○	
LocWorld18	Silicon Valley 2011	○		
LocWorld19	Paris 2012		○	
LocWorld20	Seattle 2012	○		
LocWorld21	Singapore 2013			○
LocWorld22	London 2013		○	
LocWorld23	Silicon Valley 2013	○		
LocWorld24	Bangkok 2014			○
LocWorld25	Dublin 2014		○	
LocWorld26	Vancouver 2014	○		
LocWorld27	Shanghai 2015			○
LocWorld28	Berlin 2015		○	
LocWorld29	Silicon Valley 2015	○		
LocWorld30	Tokyo 2016			○
LocWorld31	Dublin 2016		○	
LocWorld32	Montreal 2016	○		

LocWorld30 Tokyo

日 時 ● 2016年4月13日(水)～15日(金)

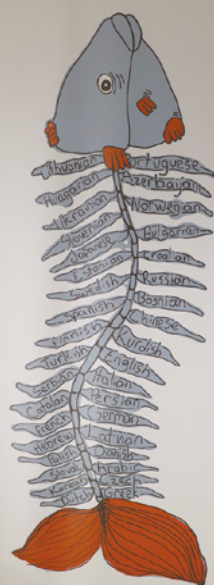
開催場所 ● 京王プラザホテル

報 告 者 ● 目次 由美子 (LOGOStar)

「ヤァ! LocWorldがついに日本へやって来る!!」と心を躍らせた業界関係者も多かったのではないだろうか。「ロックワールド」とは言っても音楽の祭典ではなく、れっきとした翻訳に関する展示会である。

LocWorld 01は2003年に米国シアトルで開催された。LocWorldの公式サイト(<http://locworld.com>)の略歴には、The Localization InstituteのUlrich Henes氏とMultiLingual誌のDonna Parrish氏が共同主催者として、ローカライゼーション業界の発展のため、友好に満ちた交流の場の形成を目的としてLocWorldが展開されていることが紹介されている。1年に1回は北米、1回は欧州で開催されてきたこの国際的なイベントは、2007年に上海で開催され、そして2013年にシンガポールで開催されて以降、アジアも開催対象地域に加えられ、本2016年によりよく東京で開催された。

「Engaging Global Customers」というテーマが掲げられた3日間にわたるイベントの初日は「プレカンファレンス」で始まった。「ラウンド テーブル」が用意され、「Game Localization」や「Localization Sales and Marketing」など、特定のトピックについて参加者同士による協議が展開された。さらに、「オープニングレセプション」も開催され、登壇者や展示ブースの担当者を含む関係者が集った。





コーヒーや軽食も用意された展示エリア

和気藹々とした
カンファレンス ディナー



2日目の夜にはMoravia社により「カンファレンス ディナー」が提供され、展示会場の外の空気も楽しむことができた。

自分自身も含め、日本からは「LocWorld 初心者」が多く見受けられた。海外からの参加者には3回、4回と各地のLocWorldを経験済みの人が多いように思われた。北米や欧州を本拠地とする企業にとっては地理的な条件が日本とは大きく異なり、開催地の考慮は不要なのかもしれない。また、翻訳に関するサービスやテクノロジーの情報交換の場として、LocWorldは参加しなくてはならないイベントとして認知されつつある傾向も伺えた。

LocWorldへの参加経験は豊富だが、来日は初めてという参加者も少なかった。展示ブースにも日本国内ではまだ馴染みの薄い海外の翻訳会社や、翻訳に関するテクノロジーベンダーが名前を連ねていた。日本での展開を検討する翻訳関連企業にとっても、東京で開催されたLocWorldは良い機会となったはずだ。

今回の東京開催は小さめである、前に参加したときはトラックが5つあったなどという声もLocWorld経験者から聞こえた。しかしながら、LocWorldというイベントを通して、翻訳に関わる人たちの豊かな国際性と、それに伴うスケールの大きさが感じられた。さらにスケールアップしたイベントとして、また日本で開催される日を楽しみにしたい。

Event Report

2日目からはセッションと展示会が開催された。45分間の講演が3つのトラックで並行してスケジュールされたプログラムでは、各セッションに対して「Advanced Localization Management」、「Global Business」、「Keynote」、「Localization for Asia」、「Technology」というラベルが示されていた。セッションタイトルには、開催地を意識した「Tailoring Your Product to Succeed in Japan」、ローカリゼーション事業の先端を伺わせる「Journey from Project Manager to Program Manager」、国際性を感じられる「Localizing for Customers and Beyond」、最新のテクノロジーを彷彿とさせる「XML in Translation」などが見受けられた。

ジャパン・インターカルチュラル・コンサルティング社のRochelle Kopp氏による同時通訳付きの基調講演「Bridging Cultural Differences with the Hybrid Approach」では、ビジネスに影響し得る日本の文化的な背景が紹介された。3日目の午前中に開催されたもう1つの基調講演「The Growing Importance of Emerging Markets」ではLocWorld共同主催者のHenes氏がモデレータを務め、Google社、Lionbridge社、NEC社、Welocalize社からの豪華なパネリストを擁していた。

基調講演の開催中はほかのトラックでセッションを開催しない、セッションとセッションの間には30分間の休憩を置くことで展示ブースを訪問する時間帯を設けるなど、運営側の配慮が感じられた。

さらに、約1時間のランチも設けられていた。そう、LocWorldの参加料には「昼食」も含まれていた（昼食を含まない「午後券」も用意されていた）。LocWorld参加者専用の「食堂」には大きめの丸テーブルが配され、ランチタイムでも参加者同士が親睦を深められる機会が準備されていた。

参加者で溢れた
セッション会場





Interview

LocWorld30 Tokyoへの軌跡 ～株式会社 十印のおもてなし～

Interviewees

株式会社 十印

代表取締役会長 勝田 美保子

代表取締役社長 片岡 温央 (対LocWorld担当窓口)

海外事業本部長 伊藤 彰彦 (LocWorld Committee member)

※インタビューにはオンラインで参加

Director of sales, Europe 小西 輝一 ((株)十印内 LocWorld 実行委員長)

マーケティング部 石川 弘美

協力

株式会社 十印

リソースマネージャー 小島 伸一

マーケティング担当 泉谷 東十郎

聞き手 ● 河野 弘毅 (日本翻訳ジャーナル)

取材 ● 2016年5月

報告者 ● 目次 由美子 (LOGOStar)

本誌のイベントレポートでも紹介したとおり、「LocWorld」(以下、LW)という国際的な翻訳イベントがついに日本で開催されました。この世界規模のカンファレンスが実にその30回目にしてやっと東京で開催された背景には、株式会社 十印によるスポンサーとしての活躍があったからこそと言っても過言ではありません。LWにかけた同社の意気込みや目標、得られた結果、そして、今後の展望についてなど、担当者の方たちに直接インタビューする機会を得ることができました。

スポンサーおよび出展社として LocWorldに臨んだ意味

「LWは翻訳業界で最も注目されるカンファレンスとなりつつあります。」

TAUS Representative や GALA Chairmanを歴任し、LWのCommittee memberも務める伊藤氏はポリコムの向こうから力強く語りました。「あきさん」の愛称で親しまれる同氏は、LWの参加者数が増加している傾向や、GALAとは趣旨が異なりクライアント側の参加がより見受けられる旨を指摘しています。



同社にとってはイベントを介しての情報交換による自社ブランドの確立がLocWorld出展の目的とのこと。つまり、自らが情報を提供しなければ情報交換は成立しない、自社ブランドを掲げて情報を提供する姿勢を貫くと相手からも情報が返ってくる、見込み顧客から相談を受けることもある、結果として、情報提供を励行する優れた企業であるというイメージにつながるとのことでした。

LocWorldを東京で開催したことの意味

LW開催地の決定は、オリンピック招致に類似するところがあるそうです。日本の翻訳業界にとっての意味を最優先して考慮し、伊藤氏は十数年前からLW主催者と東京開催について協議を重ねてきたそうです。アジア地域初のLW08は、2007年に上海で開催されました。当時、中国は非常に活気に溢れており、日本は物価が高いという印象を持たれていました。

しかしながら、第30回目という節目でもある今回の東京開催を実現できた理由の1つには、東京という都市が持つ魅力もあるとのことでした。

小西氏からは、「東京をアジアのハブとして盛り上げていきたい。さらには、韓国や中国も日本に連れて来たい、タイやインドネシアのLSPも迎えたい」と熱のこもった意見も聞かれました。高い品質基準を求められる日本は、アジアの中でもリーダーシップを発揮していきたいという自負を感じました。

LocWorld開催への道のり

LW主催者に対して同社でコンタクトポイントを担当された片岡氏は東京開催の約1年半前から会場探しに奔走したそうです。参加者数も予測でしかない中で、海外から来るお客様にも満足いただける立地条件であることなど理想的な会場を見つけるのは大変困難だったそうです。時期が早過ぎると予約を受け付けてもらえないなど、運営側ならではの苦労話も聞くことができました。

インタビュアーである河野がLWのWebサイトでITがスマートに活用されている点に触れると、「LWというイベントを皆で楽しく経験する目的がある」と伊藤氏は答えました。参加者には個別のアカウントが提供され、ログインしてセッションの参加予定スケジュールを作成・公開し、参加者同士のプロフィールを参照したり、連絡を取り合うこともできるような機能が装備されています。伊藤氏は「Newbies

Get-together in Tokyo!』というイベントを立て、LWへ初めて参加する人を募り、ミートアップ イベントを開催しています。これによって緊張が解きほぐれたLW初心者も多かったことが想像されます。

同社の展示ブースでは、和服を纏った社員により抹茶が供されました。本格的な茶道具が並べられ、「茶の湯」に関する簡潔な紹介文が英語でも用意されていました。「参加者の方たちにはとにかく楽しんでもらいたかった」という伊藤氏の言葉に尽きると言えます。限られたホテルの展示スペースという空間では制約も多く、いらしたお客様にどこまで本物を体験していただけるかという葛藤もあったとのことですが、結果として、特に海外からの参加者の間で大きな好評を博しました。その結果、TwitterやLinkedInなどのソーシャルメディアには同社ブースでのお茶会を写した写真が多数掲載され、非参加者をも対象とした大きな宣伝効果も得られたそうです。



さらに、LW初日に開催された交流会の最中、日本酒を揃えてさらに来場者に楽しんでもらうという伊藤氏の発案から、最終日には一升瓶を並べての「利酒」も実施されました。同社の発想力、そして団結しての迅速な行動力が存分に発揮され、着物姿のブース要員としても従事された石川氏は、「自分の勤務先ではあるけれど、懐の広さを改めて実感した」とのことでした。



「どこの会社のこと？」とうそぶく勝田会長の一言によってこのインタビューにおける最大の笑いが引き起こされました。そして、一旦間を置いてから、「ゆとりからもたらされる本物のたしなみ」についてもお話されました。

LocWorld主催者の反応、そして今後について

伊藤氏によるとLW30は主催者側からも大きな好評が得られ、喜びに満ちた声が多く届いたとのことでした。

東京という場所ならではの集客の容易さが見受けられた一方、日本のグローバル企業による積極的な参加といった要望も改めて認識したそうです。

ベルリンやシアトルなど過去に複数回LWが開催されている都市もあり、決定事項ではないけれど、今後も東京での開催を希望していると伊藤氏は述べています。

「日本での開催時にはぜひ日本企業からの発表が欲しい」と強調されました。

さらに、日本のグローバル企業による参加も促進し、日本だからこそその話を聞くことのできる自動車や家電のメーカーによるセッションの重要性も指摘しています。そして、海外で見られるようなメーカーとベンダーの均衡がとれた関係性も構築したいといった希望についても言及がありました。

片岡氏からは、主催都市である東京の魅力を今後はさらにアピールしたく、イベント前後に（日帰り）ツアーを企画したいとの発言もありました。

次回以降のLocWorldに出展を検討している企業へのアドバイス

とりあえず一回出展してみようという気持ちでは大きな効果は見込めないであろうと伊藤氏は考えています。ブランド形成のための投資であることを覚悟する必要がある、来場者へ伝えたいメッセージを明確にすることの重要性も強調しています。

また、小西氏も、新規顧客を即時に獲得するといった利益だけの追求よりもブランドの継続性を考慮すべきであり、企業の安心感を創出するための貢献の必要性を指摘しています。



さらに、営業担当者だけの参加ではなく、翻訳作業の実務に携わるエンジニアやリンギストなどがLWのカンファレンスに参加することによって翻訳業界全体的な交流がもたらされ、「現場のモチベーションアップ」につながるのではないかとその言及もありました。

終わりに

LocWorld30 Tokyoは成功の内に幕を引きました。そこには株式会社 十印による、なによりもまず来場者にこの世界的な翻訳イベントを楽しんでもらおうという「おもてなし」の気持ちと、会社一丸となつての貢献をこの度のインタビューで伺うことができました。日本の翻訳業界がさらにグローバルに発展する兆しを直に感じ、またその一躍を担うことのできるLWが、近い将来に再び東京で開催される日を楽しみにしたいと思います。



私は 本気で極めたい

実務に即した授業

充実の講師陣

時代に生き残る専門力を身につけた翻訳者に



アンセクレツォの目指すもの

それは「英語力」「医学力」「症例読解力」の3つの力

目的に合った用語・スタイルを用いて質の高い（商品価値のある）訳文をつくるための**英語力**、翻訳時に遭遇した医学的知識に関する問題に対し、解決方法のいとうちを見つけるための**医学力**、そして、情報を確実に読み取り、それぞれのケースについて把握し、不足情報や内容の齟齬に気づき、適切に対応する**症例読解力**。

医学翻訳を学びたい方、研修のお問い合わせは

製薬企業様向けの語学研修・安全性研修も行っております。

アンセクレツォ



医学翻訳教室 アンセクレツォ

〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-21-2 京橋第九長岡ビル 4F

株式会社ウィズウィグ内

TEL：03-5566-7757

<http://ansekureco.wysiwyg.co.jp/>

WysiWyG

ウィズウィグが選ばれる理由

ウィズウィグは医学翻訳・データベース事業で培われた経験をもとに着実に進化を遂げ、メディカルライティング、安全性管理業務、そして派遣事業など、製薬企業、医療機器企業向けの多様なサービスをご提供しています。

科学的な正確性、迅速な対応、綿密なコミュニケーション、パートナー企業に特化した業務体制の構築—これからもお客様に満足していただけるサービスをご提供し続けます。

翻訳者のご応募、業務のお問い合わせは

ウィズウィグ



株式会社 ウィズウィグ

〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-21-2 京橋第九長岡ビル 6F

TEL：03-5566-1669

<http://www.wysiwyg.co.jp/>

続・翻訳者のための 作戦会議室

第2回



去る5月29日に翻訳フォーラムでは「『翻訳のレッスン』刊行記念・シンポジウム&大オフ」を東京・文京区のお茶の水女子大学で開催した。シンポジウムと銘打った会は2012年、14年、15年に続いて4回目。初回、2回目の70名から、3回目には110名、そして今回は140名の参加を得て、盛大に執り行うことができた。

まずはご来場いただいた皆さん、様々な形で協力いただいた皆さんに感謝を申し上げたい。

今回のシンポジウムは題名にもある通り、5月27日に発売になったばかりの共著書「できる翻訳者になるために プロフェッショナル4人が本気で教える『翻訳のレッスン』」(講談社)の刊行を記念したものである。著者4人が自分の担当章を中心とした講義をした他、「めだかの学校」メンバー(後述)が成果発表を行い、また4人が翻訳にまつわるFAQに答えた。夜には恒例の「大オフ」パーティも賑やかに行われた。

深井 裕美子

翻訳者・通訳者

盛りだくさんの シンポジウム

シンポジウムの講義1は井口耕二「体育会系翻訳トレーニング論」。翻訳者にとって厳しい状況が続く中、いかにして「なりたい自分」を設定し、そのために何をしたらいいかという話から始まった。井口は元フィギュアスケート選手。競技のためのトレーニングと同じように、基礎技術を磨き続けている。現状分析から対策の立案・実施、効果測定、改善という作業を繰り返し、目標達成まで続ける。このことを「訳文で『の』の連続を避ける」「原文の内容をできるだけ短い訳文にする」という例を取り上げて説明した。

講義2は深井裕美子「翻訳を始めよう」。「翻訳のレッスン」では、「準備7割」として翻訳に取り掛かる前にしておくべき作業を説明しているが、今回はその手前の受注段階に着目し、確認すべき点について場内の皆さんから意見を得た。「断る勇氣」にも触れ、ポジティブな、提案型の断り方を推奨した。また図書館の利用法も紹介した。

午後の一番手は「『めだかの学校』発表会」。翻訳フォーラムでは、2年前から「めだかの学校」という勉強会を開催している。10人前後のプロ翻訳者と幹事4人が定期的に集まり、事前に出題された課題を検討したり、翻訳技術を磨いたりする会である。昨年、一昨年は「公開めだか」という形で、シンポジウム参加者の皆さんの前で討論をお見せしてきたが、今回は趣向を変えてこの1年(人によっては2年)に「めだか」で習得した技術や概念を各班約10分間で発表することにした。

第1班は「アウトライン」。英語話者の間では何を書く際にも「アウトライン」すなわち骨格あるいは設計図を作ってから、肉付けをしていくことが幼少時から常識となっている。われわれ翻訳者もその常識を身につけ、原作者の論理展開を読み取り、訳文で再現する必要がある。「めだか」では米国の小中学生向けテキストを使って深井が解説を行う他、毎回の課題文を「1行まとめ」する訓練を行い、書き手の想定した筋書きを読み取ってきた。アウトラインを意識することは、メリハリのある訳文につながる。またとかく一文ずつに目が行き、全体の構成を考えなくなってしまいがちなCATツール使用者も、アウトラインを読み取ることで、ぶちぶち切れた訳になることを防止できる。

2つ目の班は「訳例分析」。ある語(たとえばmost)の訳を考えるとき、一般には英和辞典を用いることが多い。しかしどんなに大きな英和辞典でも、掲載されている訳語や用例は限られている。このような場合CD-ROM辞書の例文を全文検索すれば多様な用例が得られる。用例は「前から修飾」「後ろから修飾」「文末表現」といった具合に5つのパターンに分けることができるのだが、普段の生活の中であらゆる文章をこの5パターンに峻別する訓練をすることで、手持ちの表現を増やすというのが狙いである。「めだか」では、高橋さ

きのがこの方法を紹介し、自ら用意した大量の用例カードをパターン別に仕分けるエクササイズを行っているが、その一端を今回のシンポジウムでは紹介した。

最後は「テンスとアスペクト」班である。テンスが「いつ起こったのか。以前か、今か、この先なのか」を表すのに対し、アスペクトは「動作が始まったばかりなのか、続いているのか、もう終わったのか」を指す。英語と日本語では、これらの体系は異なるのだが、原文を読むとき、そして訳文を書くときに強く意識することは大切である。ここを曖昧にしておくと、文章にキレがなくなり、ぼんやりとした訳文ができあがる。「めだか」では高橋さきのが「テンスとアスペクトは翻訳の腰紐!」(着物の着くずれを防ぐために欠かせない腰紐と同じように大切な意)と繰り返し述べ、「1000本ノック」として日常的に目に入る文章を4つのアスペクトパターンに分けることを推奨してきた。訓練の甲斐あって、多くのめだかメンバーが瞬時にアスペクトの峻別ができるようになり、訳文づくりに生かせるようになってきた。

講義3は高橋聡「辞書を読もう」。辞書の種類(CD-ROM、電子辞書、アプリ等)の説明に始まり、統一規格や串刺し検索のできる辞書ブラウザの紹介、一つの辞書を徹底的に読む方法と複数の辞書を比べ読む方法など、今すぐ生かせる情報が提供された。実際の原文を見ながら、大英和、英英、国語、英和学習の各辞典を次々と引いていく過程も説明した。これから辞書を揃える人のための必須セットの紹介も行った。

講義4は高橋さきの「翻訳のおとしあな」。「和英語林集成」を1872年に編纂した岸田吟香の紹介に始まり、以後いかに翻訳(者)が日本語の文体・語彙等を作ってきたかに触れ、機械翻訳の生み出す「伝えることのできない文章」をよしとするのか、そうした状況を阻むのかといった「日本語圏翻

訳者としての矜持」について述べた。原文を読んだ人と訳文を読んだ人が同じ絵を思い浮かべられるようにするのが現時点での翻訳の目指す形であるが、通常の翻訳、直訳・逐語訳、勝手訳、そして翻案はその理想型に対してどのような位置づけになるかを整理するとともに、「妙な訳文」を5つのパターンに分けてそれぞれの問題点を指摘し、「へんな文章」ばかりをこしらえたり、見たりしていると、翻訳に必要な調整能力が失われ(母語崩壊)、仕事続行が困難になると警告した。

トークセッション「どうしたら翻訳が上手になるか」では、『翻訳のレッスン』第5章「翻訳者の悩み相談室」執筆の際に用意した、よく耳にする質問をランダムに取り上げ、4人が回答していく形をとった。議題となったのは「専門用語に定訳はあるか」「翻訳支援ツールは使ったほうが良いか」「専門分野はどのように決めれば良いか」「常に発注される翻訳者になるには」「ボキャビルはどうしたら」「翻訳学校に行かなくてはプロにならないか」。この後、場内からの質問に答えた。

以上、ごく簡単に当日の様子を紹介したが、共著者4人の部分についてはぜひ『翻訳のレッスン』で、より奥深い解説をお読みいただきたい。

賑わった「大オフ」

イベントのいわば「夜の部」である「大オフ」は、1996年から断続的に行われてきている、翻訳フォーラムの伝統行事である。全国津々浦々から、さまざまなキャリアや専門分野の翻訳者が集まり、立食形式でお喋りをする会で、今年も80人ほどの参加を得て盛大に開催することができた。大オフの唯一の企画といえば、各自が自由に翻訳作品の展示をする「ワタシのシゴト」コーナーだが、今年は会場の音響映写設備が充実していたこともあり、映像翻訳者の方

たちの作品も上映できた。従来よりも規模が大きくなり、また初参加の方が多かったため、今年は名札に分野別のカラーシールを貼るという試みをした。会話の緒になったのであれば、幸いである。



翻訳フォーラムでは、今後もこのようなシンポジウム、オフ会、そして新設の「レッスン・シリーズ*」など、現場の翻訳者・翻訳学習者に本当に役に立つ、楽しい「場」を提供していきたいと考えている。予定については、「翻訳フォーラムからのお知らせ」ウェブサイト(fhonyaku.jp)をご参照いただきたい。シンポジウムで使用した資料も紹介している。

* 6月26日に「第1弾: 辞書とコーパス1日マスター」、7月31日に「第2弾: テンスとアスペクト1000本ノックワークショップ」を実施する。また、夏以降に「アウトラインリーディング」、秋以降に「用例分析」の各ワークショップも開催予定。

Writer Profile

深井 裕美子
Fukai Yumiko



東京都出身。上智大学外国語学部フランス語学科卒業。JR東日本、番組制作会社を経て(株)ネスト代表取締役。テレビ、映画、演劇、音楽関連の仕事が多い。主な作品に戯曲『淋しいマグネット』、写真集『リュリシーズ』(平凡社)、映画『樹海のふたり』(英語字幕)、『バイリンガルコミックス忠臣蔵』(講談社)など。翻訳フォーラム幹事として『翻訳のレッスン』(講談社)を共同執筆。1996年より翻訳学校で教鞭をとる。

「翻訳者の薦める辞書・資料」
<http://nest.s194.xrea.com/lingua/>

メディカル翻訳 最前線

ランダム化比較試験報告の グローバルスタンダード

橘 尚子

株式会社アスカコーポレーション
営業部 QC シニアリングスト

今回のテーマは「ランダム化比較試験報告のグローバルスタンダード」。CONSORT 声明という、ランダム化比較試験 (RCT) 報告、特に RCT の結果を報告する論文の質を高めるためのガイドラインについてです。

グローバルスタンダードに目配りしておかなければせっかくの翻訳が門前払いされてしまうことがある、というお話なのですが、本題に入る前に、投稿論文の翻訳の際に必要な準備について、確認してみましょう。

日本語を英語にしたら OK ?

「投稿論文の翻訳をお願いします」と依頼されたらまず何を準備されますか？

著者の近著、同分野の英語論文、対象疾患のガイドライン、用語集など、翻訳開始前に準備するものはたくさんありますが、投稿論文の翻訳準備の場合は、まず投稿先を確認し、投稿規定を一読されることをお願いしたいと思います。

ジャーナルへの投稿を成功させるために必要なのは、研究内容

の新奇性や英語の良し悪しだけではありません。ジャーナルが定めている投稿規定に従って原稿をエディットしていくことも非常に重要なプロセスだからです。

投稿規定では、原稿を作成するための細かい決まり（使用するフォントの種類や行間など）や論文の各セクションで報告すべき情報（組み入れ基準、脱落例数、評価項目、統計解析など）などが定められています。最近の傾向として、著者倫理・出版倫理に関連する情報の記載は必須です。

特に見落とせないのが文字数の制限です。規定で記載を求められる事項は山のようにあるのですが、これらをすべて、定められた制限字数内に収めるのが翻訳者さんの腕の見せ所。ここが守られていないと査読にすら回してもらえません。

どう考えても制限字数内に収められそうにない場合は、事前に削除してよい部分の候補をクライアントに確認することも必要になってきます。

翻訳者さんは著者のパートナー。気になることがあれば、翻訳作業が終わってしまってからではな

く、作業中であっても確認していただくことが重要です。

CONSORT 声明

このように、とかく縛りの多い投稿論文の翻訳ですが、投稿へのハードルをさらに上げるのが、CONSORT 声明への遵守を求めるジャーナルの規定です。

国際的な医学ジャーナルの投稿規定は、そのほとんどが国際医学雑誌編集者会議 (ICMJE) の定める Recommendations をベースに作成されています (<http://www.icmje.org/>)。

この Recommendations の中で、RCT の報告の質を高めるために、使用を推奨されているのが CONSORT 声明なのです。そのため、ICMJE 加盟誌である NEJM、Lancet、JAMA、BMJ などのインパクトファクターの高いジャーナルでは、RCT の報告の際に CONSORT の Flow Chart と Checklist を提出することが投稿規定で定められています。

First submissions to The Lancet should include: Protocols and CONSORT details for randomized controlled trials.

(Lancet 投稿規定記載例)

CONSORT とは Consolidated Standards of Reporting Trials (臨床試験報告に関する統合基準) のこと。患者がどのように割り付けられ、何人がどのような理由で脱落し、何人が解析されたのかという患者フローを示す CONSORT Flow Chart と 25 項目の Checklist、さらに、試験デザインの違いなどに対応するために追加で作成された Extensions から構成されています。 (<http://www.consort-statement.org/>)

次ページの表 1 にその一部を掲載します。HP から全体をご覧いただいて、実際の論文と比較しながら、情報をコンパクトにまとめる表現を収集してみてください。

RCT報告の質

何故これほどまでに厳しい決まりを守ってRCTの論文は作成されなければならないのでしょうか。

論文というものは最新の知見を報告するものですが、中でもRCTの報告は「エビデンスレベルが高い」とされているため、現在行われている診療実践を変えてしまう可能性があるからなのです。

ところが、1990年代に行われたいくつかの調査では、RCTの報告の質が最適というには程遠いということが明らかとなり、その質を改善するために1996年に最初のCONSORT声明が開発されました。

CONSORTは実際の論文で使用され、検証されながら改訂されてきたものですので、どのような点で論文が不完全になりがちか、という点についても知ることができます。2001年版のCONSORTで「不完全で不正確なRCTの報告」としてあげられているものの例には次のようなものがあります。

- ・アウトカムの評価が盲検化されていたか記載がない
- ・サンプルサイズについて記載がない
- ・ランダム化の方法について報告がない、など。

このような問題に対処するため、その後もCONSORT Checklistを実際に使ってRCT報告の検証と修正が続けられました。出来上がった改良版が、現在公開されているCONSORT Statement 2010です。

投稿先は必ず確認を

私たちが投稿支援業務に携わっていて困るのは、「まだ投稿先を決めていないのだが、とりあえず英語にしておきたい」というご依頼です。

本当であれば、このようなご依頼はお受けしたくありません。なぜなら、ジャーナルによって字数制限も図表の点数も、フォーマットの方式も違うのに、単に英語に置き換えただけでは、論文を投稿

する準備にはまったくならないからです。

このようなご依頼の場合、CONSORTの存在など意識せずに原稿が作成されていることも多いため、せっかく英語に翻訳したとしても必要とされている情報が不足していることが多く、CONSORTへの遵守を求めているジャーナルには投稿できないこともあるのです。

あまりにももったいないことだと思います。

論文の質は翻訳者には関係ない？

論文の内容に関わることは著者が気をつければよいことで、翻訳者には関係ない、とお思いになりましたか？

論文のコアとなる部分に加え、CONSORTで必要とされる25項目の情報を、たった2500～3000単語程度の中にまとめる。それは翻訳者さんが論文の形式やCONSORTのようなガイドラインに習熟し、これらの情報をどのように正確でコンパクトな表現でまとめるか、という観点から表現のストックをしておかなければ、実現できないことです。もう一度いいますが、翻訳者さんは著者のパートナーなのです。翻訳中に不足を見つけたら著者に知らせ、最新の知見を、グローバルスタンダードを押さえながら発信する。これも翻訳という仕事の醍醐味ではないでしょうか。

明日の医療のために

診療ガイドラインについてのあつちフォーラムに参加したとき、パネリストのドクターが「昨日より明日はもっとよい医療を患者さんに届けたい。そのために新しい、質の高いエビデンスを使いたい」とおっしゃっていました。

ある研究結果では、初回投稿のリジェクト率は79%、その後の論文を追跡したところ、アクセプト

されるまでに3～4年かかっていたという報告もあります¹⁾。その間、修正にじっくりつきあうのもまた翻訳者さんの大切な仕事です。

新しい、質の高いエビデンスをもっとタイムリーに医療現場に届けたい。そのために、翻訳にできることはまだまだあるのではないのでしょうか。

Section/Topic	Item No	Checklist item
Title and abstract		
	1a	Identification as a randomised trial in the title
	1b	Structured summary of trial design, methods, results, and conclusions (for specific guidance see CONSORT for abstracts)
Introduction		
Background and objectives	2a	Scientific background and explanation of rationale
	2b	Specific objectives or hypotheses
Methods		
Trial design	3a	Description of trial design (such as parallel, factorial) including allocation ratio
	3b	Important changes to methods after trial commencement (such as eligibility criteria), with reasons
Participants	4a	Eligibility criteria for participants
	4b	Settings and locations where the data were collected
Interventions	5	The interventions for each group with sufficient details to allow replication, including how and when they were actually administered
Outcomes	6a	Completely defined pre-specified primary and secondary outcome measures, including how and when they were assessed
	6b	Any changes to trial outcomes after the trial commenced, with reasons
Sample size	7a	How sample size was determined
	7b	When applicable, explanation of any interim analyses and stopping guidelines

表1

1) Schultz DM (2010). Rejection rates for journals publishing in the atmospheric sciences. Bulletin of the American Meteorological Society, 91(2), 231-243.

Writer Profile

橘 尚子

Tachibana Naoko

株式会社アスカコーポレーション営業部QCシニアリングスト

在宅チェッカー歴9年。チェッカー時代に様々な文書のチェックを経験、主に投稿論文の投稿支援業務、臨床試験登録業務、東洋医学関連の抄録英訳プロジェクトに長く携わる。2016年より現職。





いまさらながらの・・・

CATツール★超基本

加藤 じゅんこ

Memsource Marketing Manager

第2回 翻訳メモリってどんなもの？

翻訳支援ツールは、翻訳メモリ・用語集・機械翻訳を参照しながら、翻訳を進めていくためのツールです。翻訳支援ツールで翻訳をすると、翻訳メモリができます。翻訳メモリは、英語にすると Translation Memory。よく TM と記されます。(画面1)

中身は原文と翻訳文を対にした分節単位の辞書のようなものです。過去の翻訳資産を翻訳メモリでデータベース化して翻訳時に参考訳として参照することで、今後の翻訳に生かすことができます。

連載第2回目の今回は、この翻訳メモリについて、お伝えしていきたいと思います。

翻訳メモリと一致率

実は、翻訳メモリには業界標準形式があります。TMX形式です。Translation Memory eXchangeの略です。多くの翻訳支援ツールは、TMX形式で翻訳メモリをインポート・エクスポートすることができます。

つまり、TMX形式の翻訳メモリがあれば、翻訳支援ツールを変えても翻訳メモリをご活用いただける、ということになります。

翻訳メモリを使って翻訳を行う場合、原文との一致率によって、完全一致・あいまい一致/ファジーマッチ・マッチなしという3つのパターンが存在します。一致率は、

原文と、翻訳メモリ内の原文がどれくらい似通っているかで算出されます。

たとえば、「How to make apple pie:」が今回の原文だとして、翻訳メモリ内にまったく同じ原文をもつデータがあれば、100%一致となります。

翻訳メモリ内に「How to make perfect apple pie:」という原文があれば、あいまい一致となります。あまり一致率が低い翻訳メモリは、むしろ修正する手間のほうが大変になります。個々の状況によりますが、60~70%以上一致の翻訳メモリであれば、翻訳に活用できる場合が多いとされます。(画面2)

最近はツールによって、コンテキストマッチ(101%マッチ)という一致率も存在します。こちらは前後の文脈まで含めて完全一致、という考え方です。たとえばマニュアルの改訂版の翻訳などに活用できる一致率です。

ただ、いかに100%一致、または101%一致であっても、翻訳メモリを流し込んだ後のチェックは必要となります。というのも、そもそも翻訳メモリがっているかどうかの保証がないからです。

第1回目に書かせていただきましたメモリの作成作業の話にもなりますが、翻訳メモリができる工程としては、主に次のふたつが考えられます。

- ① 翻訳支援ツールを使用して翻訳を行い、メモリを蓄積する
- ② 過去の翻訳資産をアライン作業によってメモリ化する

①の場合、過去に誤訳が含まれている可能性はあります。②の場合は、これに加え、アラインミスなどによって間違ったメモリができる可能性もあります。

こういった部分をとことんつきつめて完璧な翻訳メモリを作る、というのは理想的ですが、現実的とはいえません。状況によります

Source: en-us	Target: ja-jp-jp			
1 Follow this simple recipe.		×		
2 You'll have a delicious homemade apple pie.		×		
3 How to make perfect apple pie:		×		

1 Follow this recipe.	SS	レシピどおりに作ってください。	TM
2 recipe	TB	レシピ	
3 Follow this simple recipe.	MI	このシンプルなレシピに従ってください。	
Follow this simple recipe.			

画面1：翻訳支援ツールの画面例

Source: en-us	Target: ja-jp-jp			
1 How to make apple pie:		×	100	

1 How to make apple pie:	100	アップルパイの作り方
2 How to make perfect apple pie:	58	完璧なアップルパイの作り方

画面2：100%一致とあいまい一致表示例

が、メモリは完璧ではないもの、と想定されるほうが良いかと思います。

翻訳メモリとタグ

翻訳メモリとの一致が100%であっても常に正しいとは限らない、ということに加え、たとえばある翻訳支援ツールでは一致率が100%だったのに、他のツールでは一致率が下がる、ということも起こります。

考えられる原因はいくつかあります。分節の区切れ目が変わること。ツールごとに解析のアルゴリズムが異なること。そして、ツールによって「タグ」が変わること。

タグは、翻訳支援ツールにとって重要な要素です。「タグ」についてご存知ない方には分かりにくい概念なので、こちらで、もう少し詳しくお伝えします。

現在、多くの翻訳支援ツールでは、オリジナルの原稿形式をXLIFF形式に変換します。翻訳はXLIFF形式の原稿で進めていくことになります。

オリジナル原稿のフォーマット情報は「タグ（内部タグ）」という形で保持されます。

翻訳支援ツールは、Microsoft Office形式のファイル・Adobe系ファイル他、様々な元原稿を扱います。その際、元の原稿の書式・リンク情報等は、タグ化してしまうことで、効率的に保持できます。

たとえば、下記のような原稿があったとします。

Follow [this simple recipe](#).

「this simple recipe」には、ハイパーリンクがついています。この原稿を翻訳支援ツールに読み込むと、このハイパーリンク箇所が「タグ」となります。

通常、翻訳時に原文と対応する訳文箇所に、タグを反映させます。

1 Follow [this simple recipe](#) 1

1 このシンプルなレシピ 1 どおりに作ってください。

すると、元のファイル形式に戻した際、タグで囲んだ箇所にきちんと元の書式情報（ハイパーリンク）がつかます。

[このシンプルなレシピ](#)どおりに作ってください。

翻訳支援ツールを使った翻訳または校正中に、「タグ」を正しく訳文に反映させることで、元の原稿形式に戻した後の処理が楽になります。

さいごに

今回は翻訳メモリのお話をさせていただきました。

翻訳メモリは原文との一致率によって、ご活用いただける度合いが異なります。ですが100%の一致率であっても、必ずしも翻訳の時間が短縮されるとはいえないこともあります。反対に、一致率が低い場合でも、翻訳作業がかなり効率化される場合もあります。

さらに翻訳メモリの業界標準形式はありますが、タグの扱いの違いなどにより、すべての翻訳支援ツールで同じ一致率となるわけはありません。

翻訳メモリは、こういったポイントをふまえていただいてご活用いただくと良いかと思います。

理想をいいますと、常に最新の情報を反映した品質の高い翻訳メモリを、翻訳プロジェクトに携わる全員で共有していくことだと思います。

ただ、品質の高い翻訳メモリを維持していこうとすると、運用方法を考える必要がでてきます。たとえば翻訳に対するフィードバックがあった場合、その結果を常にメモリに反映していくためのフローも必要になります。

個人的には、すべての翻訳メモリに対して高い品質を維持するより、ある程度は割り切っていたほうが現実的だと思います。そして翻訳メモリの一致率にかかわらず、「人が確認する・修正する」という部分は大事なポイントだと感じます。

Writer Profile

加藤 じゅんこ
Kato Junko



Memsources(メムソース) Marketing Manager (Japan)
ブログ：<http://blog.memsources.com/ja/>
早稲田大学大学院文学研究科西洋史専修修了
外資系医療機器の会社にて広報担当。突発的にWebデザインを学び、翻訳学校に通った後、翻訳会社に転職。トレーニング・サポートツール開発・業務フロー改善といった様々な角度からCATツールに携わる。
2015年8月よりMemsources Certified Trainerとしてコンサルティングサービス実施、2016年2月より現職。
地元さいたまにて、「もう一度英語をやる」大人向け英文法講座ものんびり楽しく開催中。

帽子屋の辞典十夜

高橋 聡

実務翻訳者

第2回 「ホーンビー博士のOALD」

英英辞典のなかでも、「(非英語圏の) 英語学習者のために作られた英英辞典」は、翻訳者にとっても非常にありがたく頼もしい存在です。そのうちでも特に世間一般に広く知られており、翻訳者の間でも定評があるのは、以下の3タイトルでしょう。

- Oxford Advanced Learner's Dictionary (以下、OALD)
- Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary (以下、COBUILD)
- Longman Dictionary of Contemporary English (以下、LDOCE)

今回からしばらくは、この3大学習英英辞典を、この順序で紹介していくことにします。

OALDを最初に取り上げるのには理由があります。学習英英辞典のなかでは最も古い歴史を持っていること、日本と深い関係があること、学習用として大切な特性をいくつも備えていることです。もちろん、後発のCOBUILDのほうが語義の書き方がもっとわかりやすいという好みの問題もあるでしょうし、新語や術語(たとえば startup、carbon など) になると

LDOCEの語釈のほうが適切という意見もあります。語義の説明に使われるのは、OALDが基本3,000語、LDOCEが基本2,000語です。OALDのほうが語彙が多いぶん語釈が端的に(ときにはぶっきらぼうに) 感じられ、LDOCEのほうが語彙が少ないぶん説明が丁寧に感じられるかもしれません。

さて、現在ふつうに入手できるOALDは、第8版(2010年) か第9版(2015年) です。英語版も購入できますが、『オックスフォード現代英英辞典』というタイトルで旺文社が販売しているDVD-ROM付きの製品がおすすめです(というより、AmazonなどでもDVD-ROM付き海外版はなかなか見つからないようです)。内容は英語版と変わりません。そして、旺文社は日本人ユーザー向けに「OALD8 活用ガイド」または「OALD9 活用ガイド」という小冊子を独自に制作し、公開しています。OALDを活用するうえで必要な情報が詳しく書かれているので、これを必ず入手してください(無料でダウンロードできます)。筆者が違うため解説のアプローチもけっこう違うので、

製品そのものは第8版か第9版のどちらかしかなかったとしても、このガイドは両方読んでおくといでしょう。特に「OALD9 活用ガイド」のほうには、OALDに限らず辞書を引くうえで重要な考え方(pp.12~19) が丁寧に解説されています。その一部だけ引用します。

OALD9のように見出し語がアルファベット順に並んでいる辞書は、基本的には読むための辞書だ。普段何気なく行っているが、実は辞書検索は高度で複雑な知的プロセスだ。辞書学の大家ラインハート・ハートマン教授は、辞書検索過程を下の7つのステップに分けている。

- ① 問題の認識
- ② 問題となる語の特定
- ③ 辞書の選択
- ④ 見出し語の選択
- ⑤ 語義の選択
- ⑥ 有用な情報の抽出
- ⑦ 情報の活用

(Hartmann 2001: 89-92)

辞書の検索がうまくいった場合は、この7段階を無意識のうちにクリアしているはずだ。

辞書本体は、DVD-ROMのデータをすべてインストールし、独立したアプリケーションとして使います。ただし、第8版だけは辞書ブラウザLogophile (<http://dicwizard.jp/logophile/>) に登録できるので、他の辞書と一緒に串刺し検索(複数の辞書を一括で検索)することが可能です。



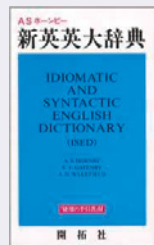
左が第8版、右が第9版です。旺文社が販売していると書きましたが、実はこの辞書にも、前回のWebsterほどではありませんが、ちょっとややこしい歴史があります。

この辞書の最初の編者は、A. S. Hornbyというイギリス人の言語学者です。Hornby博士は、大正から戦前にかけて日本の旧制高校・大学で英語を教えていました。そのとき「日本人学生は動詞の使い方・冠詞・名詞の単複の問題などに誤りが多いことに気づいたために（リーフレットより引用、後述）、辞書を執筆することになった」といいます。初版は、太平洋戦争中の1942年に開拓社から出版されました。このときのタイトルは Idiomatic and Syntactic English Dictionary といい、ISED と略称されます。

私たちが今これほどお世話になっている英英辞典の祖が、英語を敵性語とみなしていた先の大戦中に出版されていたというのは、なかなか興味深い事実です。初版の原稿は、かなり苦労して英国に持ち込まれたのだそうです（博士自身も42年に帰国）。

その後は、辞書の著作権がオックスフォード大学出版局に移り、改訂のたびに少しずつ名前を変えていきます。初版（1948年）が Learner's Dictionary of Current English (LDCE)、第2版（1963年）が Advanced Learner's Dictionary of Current English (ALDCE)。そして第3版（1974年）で、大改訂にあわせて Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English (OALDCE) となり、最終的に今の Oxford Advanced Learner's Dictionary (OALD) に落ち着きます。

おもしろいことに、1942年に出た ISED は、なんと当時の内容のまま今でも、『新英英大辞典』という名前で開拓社から販売されています。名前こそ大辞典ですが、今の OALD より少ない、たった1,000の基本語彙で使えるというのが特徴です。また、OALDCE という名前になってからも、ある時期まで『オックスフォード現代英英辞典』は開拓社から販売されていました。



左が ISED（新英英大辞典）、右が OALDCE 時代に開拓社から出ている『現代英英辞典』です。今、一定年齢以上の方なら、学生のころ、このどちらかの開拓社版を愛用した人が多いのではないのでしょうか。

先ほど「リーフレットより引用」と書いた部分は、私の手元にある開拓社版 OALDCE に付属している「使用の手引書」から抜粋しました。このリーフレットでは、OALD の歴史と特色を語ったあとで、動詞型（このころの OALDCE では、動詞が文型によって25のタイプに分類されていた）、本文で使われるラベルなどが説明されています。"Idiomatic and Syntactic" というオリジナルのタイトルに言及したうえで、イディオムの見方についても解説してあります。また、今では、学習英語辞典で定番となっている名詞の可算・不可算、[C] と [U] の表記が、実は ISED で Hornby 博士が使い始めた画期的な工夫だったこともわかります。

ただし、かつての動詞25分類は、表でいちいち確認しなければならないので、実はなかなか面倒なものでした。たとえば、suggest を引くと、手元の紙版には [VP6A, C, 9, 10, 14] などと書いてあります。最近の OALD では、suggest something (to somebody) suggest itself (to somebody) suggest (that) suggest doing something などのように書いてあり、ずっとわかりやすくなっています。

このリーフレットを読み返してみても感心したのは、最後に「学習英英辞典」に載っている情報の限界も説かれていたことです。たとえば、百科項目である Labour Party の説明などは必要にして十分だが、

たとえば carp は "large fresh water fish that lives in lakes and ponds" だけでもの足りないと書かれています。

開拓社版でも旺文社版でも、付属の小冊子にこれだけ力が注がれているという点は、注目に値します。OALD（または OALDCE）が、日本の英語学習者にとってそれだけ重要な存在だったという証拠でしょう。

辞書ブラウザでのノウハウ：

ちなみに、ここで例に挙げた Labour Party ですが、アプリケーション版で検索する場合には "Labour Party" と入力すればヒットします。一方、辞書ブラウザ Logophile では「前方検索」ではなく「後方検索」にしないとヒットしません。見出しが "the Labour Party" だからです。アプリケーションや電子辞書端末では、このような場合に「冠詞を無視する」機能がはたらくのでしょうか。しかし、Logophile にはそういう機能がないため、「後方検索」が必要になるわけです。

なお、英語学習者向けの英英辞典は、いずれもオンラインのリソースが充実しているという特徴があります。しかもそれを無料で使えます。OALD の場合は、<http://www.oxfordlearnersdictionaries.com/> です。

Writer Profile

高橋 聡
Takahashi Akira



CG 以前の特撮と帽子をこよなく愛する実務翻訳者。翻訳学校講師。学習塾講師と雑多翻訳の二足のわらじ生活を約10年、ローカライズ系翻訳会社の社内翻訳者生活を約8年経たのち、2007年にフリーランスに。現在は IT・テクニカル文書全般の翻訳を手がけつつ、翻訳学校や各種 SNS の翻訳者コミュニティに出没。最近では、翻訳者が使う辞書環境の研究が個人的なテーマになっている。ブログ「禿頭帽子屋の独語妄言」
<http://baldhatter.txt-nifty.com/trados/>

『何でも 教えて キカク』

田 島 奈 々

JTF/ISO規格検討会 翻訳プロジェクトリーダー
株式会社翻訳センター 品質管理推進部 部長

ISO17100の審査の 概要と流れ

今年度から執筆させていただいている規格シリーズ。今回は、ISO17100の認証取得を考えている翻訳サービス提供者向けに、審査の流れをお伝えします。

審査日数は拠点と 分野の数に影響する！

認証取得を検討する際に最も気になるのは審査当日のことではないでしょうか。審査日数は、会社の規模よりも拠点や取扱分野の数に左右されます。

弊社の場合、大阪、東京、名古屋の3箇所に拠点があり、特許、工業、医薬、金融の4分野を扱っています。従業員数は約400名、フリーランス翻訳者の登録は約4300名です。このような状況で、審査は1.5日間にわたって行われました（詳しくは表を参照）。審査日や開始時刻は審査機関と相談しながら、審査の約1か月前に決定されます。

弊社の場合、翻訳者の登録手続きや管理は東京の1拠点に集約されており、翻訳プロセスも3拠点4分野で統一され、同じ受注発注システムで管理しています。これら

の説明が1回で済んだこと、また、テレビ会議で他拠点とつなぐ環境を用意できたことから、審査時間を大幅に短縮することができました。

実際の審査時間は 意外と短い？

審査期間中ずっと審査が行われているわけではありません。説明の時間、昼食や審査員だけで報告書をまとめる時間も含まれていませんから、本当の意味で緊張しながら審査を受ける時間は、翻訳者、バイリンガルチェック担当者、プロジェクトマネージャーの力量評価部分（箇条3）で90分、サンプリングによる翻訳プロセス（箇条4～6）のエビデンス確認で90分、合計180分程度です。分野が追加されるごとに90分を足せばおよそその時間が分かります。

審査員の人数は？

弊社には、審査員はチームリーダーとチームメンバーの2名がいっぱいいました。2日目、審査員が一人ずつ分かれて2分野のサン

プリング審査を同時に行いました。分野が1つであれば審査員1名ということも十分に考えられます。複数分野のサンプリング審査を同時に行う場合、部屋を2室用意しなければなりませんのでご注意ください。

審査の流れは？

【初回会議】

初日の冒頭には「初回会議」と称されるものがあります。「審査で使う言語は日本語です」といった基本的な審査の説明が多いので、参加者は最低限の人数に絞るとよいでしょう。

【対象組織等の確認】

初回会議後は、事前に提出した調査書に基づいて、対象の拠点、分野、言語方向の確認があります。弊社の場合、この時間を活用して全社で共通して使用している受注発注システム、社内グループウェア、翻訳支援ツールをプロジェクトに投影してご紹介しました。審査をより円滑に進めるために、組織図や業務マニュアルをお見せするのも有効だと思います。パソコンやデータの管理を1つの専門部署が一括管理している場合は、そういったこともこの場で伝えておくともよいでしょう。

【箇条3の確認】

さて、ここからが本格的な審査です。1時間半をかけて箇条3（翻訳者、バイリンガルチェック担当者、プロジェクトマネージャー等の登録手順や力量評価）の確認が行われます。

翻訳者の募集から登録までの流れを説明すると同時に、トライアルの問題や模範解答、採点ポイント、評価シートをお見せします。評価シートには当然、ISOで要求されている力量が盛り込まれていなければなりません。翻訳者全員がISO適合者ではない場合、どのように区別しているかの説明も必要です。

翻訳者だけでなく、バイリンガ

ルチェック担当者やプロジェクトマネージャーについても同様のことがいえます。

特にプロジェクトマネージャーについては、規格文書に具体的な要求事項が記載されていないので、自社でどのように解釈し、どのようなルールで適合判定しているのかを説明できるようにしておきましょう。少なくとも判定基準は文書化しておく必要があります。

【審査結果の中間確認】

審査が2日間に及ぶ場合、初日の最後に、それまでの審査で検出された課題を共有していただけます。また、どの案件で箇条4～6のエビデンス確認がされるのか、この場で決定されます。分野・言語方向ごとに1案件ずつ選べれますので、分野、言語方向、文書名、受注日、納品日などを記載したISO適合案件リストを準備しておきましょう。すべての審査が同日に行われる場合、エビデンスがすぐに取り出せるよう事前に準備しておく必要があります。

【箇条4～6の確認】

ここからは、箇条4～6の確認です。選ばれた案件について1時間半をかけてエビデンス書類を見せながら遵守状況を証明します。

まず、担当したプロジェクトマネージャーが案件の概要を説明します。お客様は誰で（初めてのお客様か常連様か）、どのように依頼があったか（メールか電話か）、いつ正式に発注になって、いつ納品したか等を説明をします。

審査員が適宜「お客様から依頼があったときのメールを見せてください」とか、「翻訳者をどのように選定したか説明してください」といった質問をしますので、都度対応します。該当の翻訳者やバイリンガルチェック担当者がいつ登録されたのか、登録時のトライアルの結果はどうであったか、実績はどのくらいあるのか、大学卒業資格はあるのか、細かく確認されます。

参考：審査の流れと時間割（例）

審査1日目

時間	審査員1	審査員2
13:00-13:20 (20分)	初回会議	
13:20-15:00 (100分)	対象範囲等の確認	
15:00-16:30 (90分)	箇条3の確認	
16:30-17:00 (30分)	審査結果の確認	

開始宣言のようなもの。名刺交換はありませんので、初回会議と終了会議の出席者リストを事前に準備してお渡しします。

事前調査書の内容が再確認されます。調査書の内容を把握されている人が同席しましょう。不安な点があれば、この時間を使って相談してみてください。

いよいよ審査の開始です。翻訳者、バイリンガルチェック担当者、プロジェクトマネージャーの評価基準や方法を説明します。トライアル問題や模範解答を用意しておきましょう。

当日検出された課題を教えていただきます。また、箇条4～6は実際の案件（プロジェクト）を使っての審査になりますので、案件の選定が行われます。案件のリストも準備しておきましょう。

審査2日目

時間	審査員1	審査員2
9:30-11:00 (90分)	箇条4～6の確認 (分野A)	箇条4～6の確認 (分野B)
11:00-12:30 (90分)	箇条4～6の確認 (分野C)	箇条4～6の確認 (分野D)
12:30-13:30 (60分)	昼食	
13:30-14:00 (30分)	検出課題の確認	
14:00-14:30 (30分)	経営者との面談	
14:30-15:30 (60分)	審査のまとめ	
15:30-16:00 (30分)	終了会議	

箇条4～6は全て実際の案件を見ながらの審査です。エビデンス類（クライアントや翻訳者とのメールや受注発注システムの画面）を予め用意しておきます。分野につき約90分かかります。

審査中に見つかった課題を共有します。この場で共有した内容が報告書に記載されます。

経営者と審査員が面談できる時間が設けられています。経営者の参加が難しい場合は審査機関に申し出てみてください。

審査員だけで報告書をまとめる時間です。

既に共有した課題が報告書に間違いなく反映されているかを審査員と共に確認して審査は終了です。

【検出課題の確認、終了会議等】

箇条4～6の確認が终れば、審査は終了したも同然です。検出された課題があれば、終了会議を待たずに口頭で共有していただけますが、異論があればその場で率直にお伝えして構いません。

けるかもしれません。相談に乗ってもらえるようなつもりで審査に臨みましょう。

審査を受ける際の心構え

審査を受ける際、どうしても合格したいという気持ちから、実際以上に良く見せたいものですが、ありのままを正直に説明してください。そうすることで、プレッシャーが一気に和らぎます。審査員は決して意地悪をして不合格にするために審査にきているわけではありません。不安な点があれば、どうすれば合格水準に達することができるのかアドバイスをいただ

Writer Profile

田嶋 奈々
Tajima Nana



兵庫県出身。神戸市外国語大学イスパニア語学科を卒業後、貿易会社での勤務を経て、(株)翻訳センターに入社。メディカル分野のチェッカーとして約10年間の経験を積んだ後、2012年以降は社内の品質管理責任者として全社的な仕組みづくりを担う一方で、日本翻訳連盟の会員企業の一員としてISOの国際標準化活動（特に翻訳サービスに関する国際規格ISO17100の策定）に携わっている。



翻訳品質のランチボックス

西野 竜太郎

翻訳者／グローバル化・コンサルタント

翻訳の「品質」とは(2)

Garvinの5分類の関係

連載第1回でGarvinの5分類を紹介しました。翻訳業界で「品質」が意味するところは多様ですが、これを使えばさまざまな立場を分類し、議論の共通基盤にできます。Garvin^(注1)によると、品質の定義のほとんどはこのいずれかに入るそうです。しかし1つの定義のみを用いると問題が生じるとも述べています。Garvinは製造業における

例を挙げ、製品が設計段階から販売段階まで移るのに合わせて品質の定義を変えなければならないとしています。例えば、市場調査ではユーザーベース、それをプロダクトベースの特性に変換し、そこから仕様を作って製造では生産ベースを用いるといった具合です。

段階に応じて異なる定義を使うべきだという考え方は分かりました。しかし5つは複雑にからみ合っていて、どのような関係にあ

るのか分かりにくい状態です。そこで、まずこの5つの関係を筆者なりに整理してみます。品質評価アプローチ全体の「枠組み」だと言えるでしょう。以下の図をご覧ください。

超越的

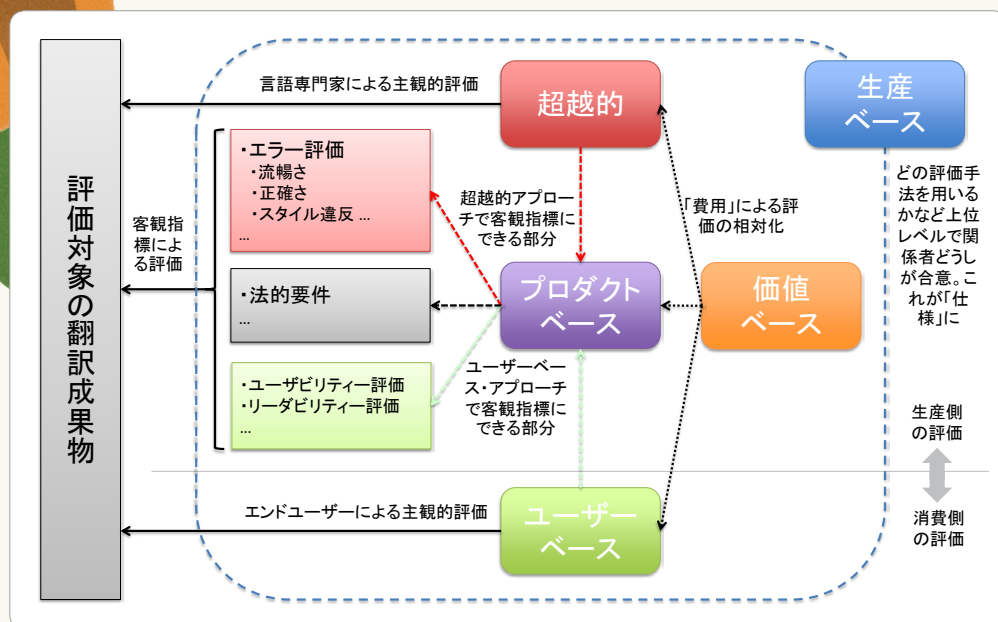
まず、中央上部に超越的アプローチ(赤の角丸四角形)があります。図左端の「評価対象の翻訳成果物」に向けて実線矢印が引かれており、「言語専門家による主観的評価」とあります。具体的には、批評家が小説や映画の翻訳について評論するケース、あるいは翻訳学校で教師が生徒の訳文を評価するケースなどがあり得るでしょう。主観的とありますが、決して悪い意味ではありません。長年の経験や独自の感性に基づく判断は重要です。この角丸四角形からは下の「プロダクトベース」に点線矢印が伸びています。これは超越的アプローチのうち、比較的客観性の高い指標にできる部分がプロダクトベースの評価に変換されるという意味です。

ユーザーベース

次に、図中央下部のユーザーベース(緑の角丸四角形)です。左向きの実線矢印に「エンドユーザーによる主観的評価」とあります。例えばユーザーが海外ゲームの翻訳について感想を掲示板に書き込むケースなどが考えられるでしょう。こちら主観的ですが、実際の読者がどういう印象を持ったのかという情報には価値があります。超越的と同様、点線矢印がプロダクトベースに伸びています。例えばユーザビリティ評価のような指標に変換できる部分です。また、ユーザーベースは翻訳の「消費側」(最終読者側)からの評価であり、ほかの4つは翻訳会社やクライアントなど翻訳の「生産側」からの評価と言えます。

プロダクトベース

続いてプロダクトベース(図中



Garvinの5分類に基づく翻訳品質評価アプローチの関係図(2016年5月版)

央の紫の角丸四角形)です。前述のように、超越的とユーザーベースのアプローチで比較的客観的に指標化できる部分がプロダクトベースの特性に変換されます。超越的アプローチからの特性は、エラー評価が典型的でしょう。エラー評価とは一般的に、誤訳、スタイルガイド違反、用語集違反などがあればマークし、それぞれに重大度で点数を付ける方法です。合計点数が一定の値を超えると不合格などの判断を下します。数値として測れるためプロダクトベースの一方法だと考えられます。

超越的やユーザーベース以外にも、プロダクトベースの特性は導き出せそうです。例えば医薬関連の翻訳文書が現地の法的要件を満たしているか否かを評価するケースです。このようにプロダクトベースでは、ある程度の客観性がある指標を用いて翻訳成果物を評価します。

価値ベース

上記の超越的、ユーザーベース、およびプロダクトベースという3つのアプローチでは、翻訳成果物を直接的に評価します。しかし価値ベース(図中央右のオレンジの角丸四角形)では直接的には評価しません。かかる費用に対して便益が大きいのか小さいのかで評価します。つまり費用という視点で品質を相対化するのです。そのため、図では直接に評価対象の翻訳成果物に線がつながっておらず、相対化対象の3つに点線が引かれています。

生産ベース

最後に図右上にある生産ベース(青の角丸四角形)で、関係者間で合意した仕様や要件をどの程度満たしているかで品質を測ります。仕様では、どの評価方法(例:プロダクトベースのエラー評価)を用いるのか、検収時のしきい値は

いくつか、費用はどうするのか、といった点で合意します。生産ベースも直接的に翻訳成果物を評価するわけではありません。生産ベースではほかの4つのうち、何をどのように用いるのか、上位レベルで仕様として規定するのです。そのため、図では生産ベースの点線がほかの4つを囲んでいます。

どの評価方法をいつ使うか

冒頭で述べたようにGarvinは、市場調査段階でユーザーベース、それをプロダクトベースの特性に変換し、そこから仕様を作り製造段階で生産ベースを使うという製造業の例を挙げています。翻訳業界でも同様の方法が使えるでしょう。具体例を示してみます。まず翻訳者のような言語専門家が普段主観的に判断している部分をプロダクトベースの特性に変換します。典型的にはエラーの分類や重大度の設定です。エラー分類はこれから作るのではなく、業界のもの(LISA QAモデル、DQF、MQMなど)も利用できます。場合によってはユーザー調査結果からプロダクトベースの特性を作成してもよいでしょう。次に、そのプロダクトベースの指標のうちでどれを用いて翻訳成果物を評価するのか、しきい値はどうするのか、仕様化して関係者間で合意します。最終的にはこの仕様を満たしているかどうかで品質を評価します。

ビジネスでは生産ベース

上記の例では、仕様を満たしているかどうか最終的な判断基準であるとしています。生産ベースの評価方法です。複数の事業者が関わるビジネスの場面では、やはりこの生産ベースを用いるべきだと筆者は考えます。ビジネスではどうしても経済的な利害関係が生

まれます。例えばクライアントの言語専門家による評価は大事ですが、その判断が毎回揺らいで修正を求められると翻訳会社は困るでしょう。また翻訳者の場合、翻訳会社から短納期で納品を求められたのに、後で「ミスが多すぎる」と低評価を下されたら信用にも関わってきます。どの評価手法(例:プロダクトベースのエラー評価)を用いるか、短納期による品質低下はどの程度許容するのかなど、まずあらかじめ評価の枠組み自体を上位レベルで合意する必要があります。その後、プロダクトベースなどで直接的に翻訳成果物を評価します。実際、ASTM F2575やMQMなど海外のいくつかの品質基準では生産ベースが採用されており、「翻訳品質とは仕様を満たす程度である」と定義されています。もちろんビジネス以外の場面では、生産ベースの仕様を作成することなく、例えば超越的アプローチですぐに評価しても問題はないでしょう。

今回はGarvinの5分類を整理し、関係図として提示しました。この図は品質評価アプローチ全体の枠組みだと言えるでしょう。ただしあくまで枠組みであるため、どう品質改善に活かせるかといった点には触れていません。次回からはエラー評価を中心に、具体的な品質評価手法について見ていきます。

Writer Profile

西野 電太郎

Nishino Ryutaro



合同会社グローバリゼーションデザイン研究所代表社員。TAUS Representative、JTF標準スタイルガイド検討委員も務める。情報システム学修士(専門職)。著書『アプリケーションをつくる英語』で第4回ブクログ大賞(電子書籍部門)を受賞。雑誌記事に「Learning localization in context」(MultiLingual誌 2013年12月号)など。趣味はジャズ鑑賞とアニメ鑑賞。

注1: Garvin, D. A. (1984). What Does "Product Quality" Really Mean? *Sloan Management Review*.

翻訳者のための Word 入門

新田 順也

ブログ「みんなのワードマクロ」管理人

Word をチューニングする

作業の効率化のため、日常の繰り返し作業を簡単に実行する仕組みを作ります。これがWordやパソコンの設定変更です。本連載では、設定変更のことをチューニングと呼びます。このチューニングでは、「蓄積」、「修正」、「自動化」に注目します。まず、チューニングの一般的な考え方を説明し、次にWordやパソコンでの応用方法を紹介します。

蓄積する

情報を蓄積する癖をつけると、繰り返し作業の効率化がしやすくなります。一般的な情報の蓄積手段として、メモ帳、ブラウザのブックマーク、IMEやATOKのユーザー辞書登録、Evernoteなどがあります。

たとえば、ショートカットキーをメモ帳にまとめてもいいと思いますし、付箋紙に書き出してモニターに貼り付けてもいいですね。メモしやすさと使いやすさを考慮して手段を選びます。「後で修正すればいいので、とりあえず情報をためる」というスタンスで蓄積を始めたらいと思います。

なお、Evernoteは情報を分類して蓄積できる無料ツールです。この手のツールの使い方にはコツがあります。特定の使い方を想定して作られているからです。そのため、直感だけを頼りにして使いこなすのは難しい場合があります。まずは書籍やネット記事を参考に、他の人の使い方を真似することをお勧めします。

修正する

蓄積した情報を必要に応じて修正します。調べものの作業工程や翻訳のチェック工程を書き留めておけば、毎回同じ作業をもれなく実行できます。作業工程は目的や経験に応じて変わりますから、時々修正が必要だと思います。

修正のために、蓄積した情報を探し出す仕組みも必要です。この点も考慮して、必要なときは蓄積手段自体を変更するのもいいと思います。

自動化する

蓄積した情報を自動で実行する仕組みがあると便利です。私は

この観点からWordマクロを開発しています。たとえば、WordからWeb検索を自動化する「右クリックでGoogle!」(フリーウェア)は、検索コマンドを蓄積し自動的に呼び出す仕組みそのものです。

Wordやパソコンが提供する仕組み

このチューニングの考え方をWordやパソコンで使います。情報の蓄積と自動化(呼び出し)には、「ピン留め」機能が役立ちます。Windows OSやOffice製品には「ピン留め」の仕組みがあり、共通の考え方でチューニングできます。考え方を理解すれば、異なるバージョンのOffice製品や他のアプリケーションでも応用できます。チューニングに慣れてくると、「ピン留め」以外の新しい仕組みを予測しながら自分で探せるようになります。まずは「ピン留め」から始めましょう。

ファイル・フォルダにアクセス

よく使うファイルやフォルダに素早くアクセスするために、「ピン留め」機能を使います。「最近使用したファイル(フォルダ)」を「ピン留め」で整理してみましょう。

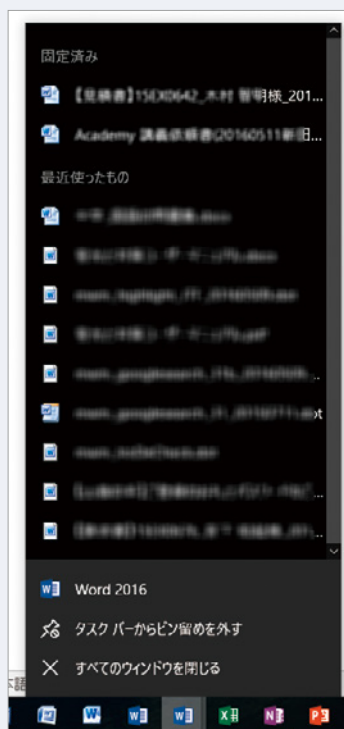
Word 2010以降で採用されているBackstageビューで説明します。Backstageビューは、[ファイル]タブをクリックすると表示されます。Word 2010では、[最近使用したファイル]という項目があり、ここにファイルやフォルダが時系列で表示されます。ファイル名やフォルダ名をクリックして開きます。(画面1)

Word 2013でも同じことができます。[開く]の項目に[最近使った文書]と[コンピューター]という項目があります。これにより、ファイルとフォルダの一覧表示を切替えます。[Ctrl] + [O]でこの画面を表示できます。(画面2, 3)

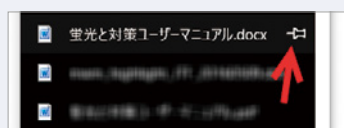
ピン留めで表示項目を管理する

一覧表示されているファイルやフォルダの項目の右端に「ピン」が見えますか？ここをクリックすると、ピンが刺さり、項目が一覧の上側に固定されます。これが「ピン留め」の効果です。よく使うファイルやフォルダを固定して常時表示させるのです。固定を解除する場合には、再度ピンをクリックします。

この「ピン留め」の考え方は、Windows 7で導入されたジャンプリストでも使えます。画面下にある「タスクバー」に表示されたアプリケーションのアイコン上で右クリックします。以下のように、最近使ったファイルの一覧が表示されます。



さらにファイル名にカーソルを合わせると、右端に「ピン」が表示されるのです。



もう予測がつきますね。このジャンプリストにもファイル名を「ピン留め」できるのです。Windowsのバージョンにより表

示や呼び方が異なりますが、考え方は同じです。Wordに限らず、Windowsの他のアプリケーションで「ピン留め」機能を探してみてください。

たとえば、ブラウザにも「ピン」があります。「ピン留め」できる項目はアプリケーションにより異なります。様々な場所で「右クリック」して試してみてください。「ああ、なるほど…」という発見がありますよ。新しい発想に触れると、パソコンのチューニングがもっと楽しくなると思います。(画面4)

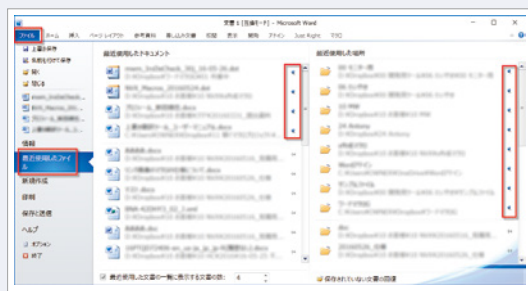
エクスプローラーの機能を活用

エクスプローラーの左側の「ナビゲーションウィンドウ」に表示される、「お気に入り」、「ライブラリ」、「クイックアクセス」をご存知ですか。いずれも、パソコン内に散らばったフォルダやファイルを仮想的に（つまり、移動せずに）特定のフォルダ内で管理する仕組みです。(画面5)

この機能は徐々に進化してきており、Windows 10の「クイックアクセス」では「ピン留め」も使えます。興味のある方はネットや書籍で使い方を調べてみてください。

不要なファイルやフォルダを閉じる

以上のように、ファイルやフォルダに素早くアクセスする方法が分かりました。あとは閉じる方法です。万能なショートカットキーは[Alt] + [F4]です。これは、ウィンドウを閉じるショートカットキーです。ファイルのみならずアプリケーションやパソコンも終了できます。現在開かれているファイルやブラウザのタブを閉じる場合には、[Ctrl] + [W]を使ってみてください。



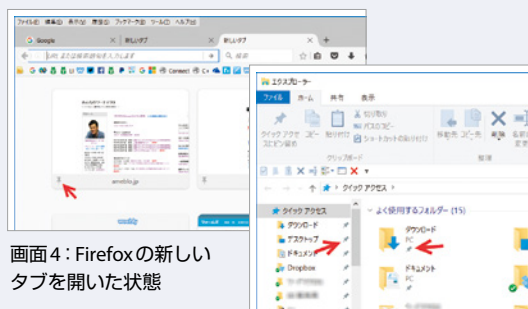
画面1：Word 2010



画面2：Word 2013 最近使った文書



画面3：Word 2013 コンピューター



画面4：Firefoxの新しいタブを開いた状態

画面5：Windows 10のエクスプローラー

Writer Profile

新田 順也
Nitta Junya



特許翻訳者、Wordアドイン開発者、Wordのセミナー講師。エンジニアリング会社、特許事務所を経て独立。ブログで数百のWordマクロを公開。翻訳をする傍ら、翻訳会社、マニュアル制作会社、電機メーカー、特許事務所等々のクライアントにWordのカスタマイズやWordマクロ活用のコンサルティングを実施。2011年から毎年Microsoft MVPをWord部門で受賞。代表ソフトは、Wordで動く翻訳チェックソフト「色deチェック」。

■ブログ「みんなのワードマクロ」
<http://ameblo.jp/gidgeerock/>

機械翻訳の近未来

本間 奨

日本特許翻訳株式会社 代表取締役

第2回 xmlとワード文書(リッチテキスト)

1. ドキュメント形式

連載第2回目は翻訳に関係するドキュメント形式についてお話ししたいと思います。翻訳の観点で関係するドキュメント形式といえば、プレーンテキスト、pdf、ワード、htmlやxmlなどが関係します。以下ではxmlとリッチテキストという2つの形式に焦点をあてて説明したいと思います。ドキュメントは、人間が読むためのものですが、電子化されたドキュメントは機械(コンピューター)可読でもあります。

xml (<http://www.w3schools.com/xml/default.asp>) はhtml同様テキストエディターで簡単に作成、修正、表示ができることから人間可読といえますが、リッチテキストと比べると、ワード文書のようにフォントを指定したりすることはできず、専ら機械用の汎用化されたデータといえます。プレーンテキストとの比較でいうと、構造タグと修飾タグでセンテンスに意味を与えてくれます。例えば、特許公報はxmlで各国特許庁から発行され、検索データベースなどの機械で読み込み、検索項

目で識別されてデータローディングされます。以下では特許公報のxmlに絞ってご説明したいと思います。

2. 米国公開特許xmlの例

公開特許のxmlは平均的にはおおよそ50Kバイト程度のファイルサイズになります。特許公報は、書誌的事項(発明の名称含む)、要約、請求の範囲、詳細な説明の大きな段落があり、さらに各段落内固有の段落があります。例えばUS20150344006A1公報の請求の範囲の段落は、

例1:xml公報ファイルのテキストエディター表示

```
<claims id="claims">
<claim id="CLM-00001" num="00001">
<claim-text><b>1</b>. A brake pedal
assembly comprising:
<claim-text>a brake pedal arm having
an initial position;</claim-text>
<claim-text>an adjustment
subassembly configured to adjust the
initial position;</claim-text>
<claim-text>a preload spring
configured to provide a preload force to
the brake pedal arm; and</claim-text>
<claim-text>a preload adjustment cam
in cooperation with the brake pedal arm,
the adjustment subassembly and the
preload spring configured to change the
preload force in response to a change in
the initial position.</claim-text>
```

```
</claim-text>
</claim>
以下 請求項2~請求項18省略
</claims>
```

のように構造タグ<claims>で始まり、</claims>までの範囲が該当します。そして第1クレームは構造タグ<claim id="CLM-00001" num="00001">で識別されます。この下位の構造タグとして、<claim-text>タグがあり、第1クレームの構成要素を区切ったり、構成要素間の階層関係(<claim-text>タグのネスト関係から上位下位関係は無限に作れます)を指定することができます。特許情報検索システムで表示される外国公報フルテキストは、このような構造タグや改行情報を削除しているものが多く、階層関係は原文xmlをみることで初めて分かります。

1はボールド指定の修飾タグで、構造タグとは異なります。この修飾タグはこのほか、<i>タグ(イタリック表示指定)や<u>タグ(アンダーライン指定)があります。1文字以外の修飾タグで重要なのは上付き下付き文字の指定タグでそれぞれ<sub>と<sup>で指定します。Al₂O₃であればAl₂O₃のようにあらわします。先ほどのタグの場合、機械翻訳上は削除される必要があります。理由は、センテンスのある部分をrrrxxx ss yy ttのようにボールド指定した場合、語順が入れ替わってしまうと、タグが先に来てxmlシンタックスエラーとなるためです。一方<sub>,<sup>タグは局所的に修飾することと、その重要性から削除はされません。

翻訳者が直接xml原文を渡されて翻訳することはまれとおもいますが、自動機械翻訳の世界では、xmlを原文として翻訳することが通常のパターンになっています。このほか、数式専用のxml形式mathMLやテーブルのxmlなどが公報xmlに含まれます。一般の方がご覧になるイメージ公報はxml公報をレンダリングするひとつの具体化されたもので、xmlはデー

タですので、表示プログラムによりxmlから段組やフォントなどどのように表示するかは自由で、このようなレンダリング形態は無数に存在することが可能です。現在、日本特許庁、米国特許商標庁、中国特許庁、欧州特許庁からはxml公報が発行され、一般ユーザーが眼にすることが出来ます。

3. リッチテキスト形式

リッチテキストはMicrosoft OfficeのWordで表示したり編集したりすることが可能なドキュメント形式です。xmlとの相違点は構造タグに相当する概念はなく、ある文字列がどの観点のデータかをタグで明示することができません。あくまでもどの場所にどの文字列をどのように修飾してレンダリングするかを規定する仕組みといえます。

xmlとリッチテキストの共通点は、人間可読である点です。docやdocx形式がバイナリーのため人間が読めない形式であるのに対してリッチテキストはテキストエディターで表示・編集が可能である点が同じワード文書形式のdoc、docxと大きく異なります。例えば2.のxmlの第1クレームをリッチテキスト変換した例を以下に示します。rtfファイルのエディター表示結果は以下の通りです。

例2：例1のxmlをrtf変換したrtf例のテキストエディター表示

```
{\rtf1\ansi\deff0\defab920{\fonttbl
{\f0\fswiss Meiryou UI;}
{\f1\froman\fcharset2 Symbol;}
{\f2\fswiss\fpqr2 System;}
{\f3\fswiss\fcharset1 Arial;}
{\f4\fswiss Arial;}
{\f5\fscrip Mistral;}
{\f6\fswiss Meiryou UI;}
}
{\colortbl\red0\green0\blue0;
\red255\green0\blue0;
\red255\green0\blue255;
\red0\green0\blue255;
\red0\green155\blue25;
\red16\green78\blue238;
\red23\green232\blue232;
\red240\green240\blue13;
\red249\green151\blue4;
\red255\green255\blue255;}
\pard\plain\f6\fs20\cf0
\par
```

```
{\b\cf2 1\b0\cf0}. A brake pedal
assembly comprising:
\par
a brake pedal arm having an initial
position;
\par
an adjustment subassembly configured
to adjust the initial position;
\par
a preload spring configured to provide
a preload force to the brake pedal arm;
and
\par
a preload adjustment cam{\highlight5{\b\cf6 in cooperation with the brake
pedal arm\b0\cf0}}, the adjustment
subassembly and the preload spring
configured to change the preload force
in response to a change in the initial
position.
\par
\par }
```

この最初の{\fonttbl}ではフォント指定のためのフォント定義があり、この例ではf0からf6まで定義しています。次に{\colortbl}からフォントカラーテーブルが定義されています。{\par}は改行を指定します。xmlで1で表示していた部分に対応して、リッチテキストでは{\b\cf2 1\b0\cf0}のように開始タグ{\b\cf2}が、終了タグ\b0\cf0}が用いられています。{\b}はそれ以降の文字全てをboldに指定します。{\b0}は元に戻します。{ 記号及び } 記号はタグ開始とタグ終了を表しています。かならず{ 記号及び } 記号で閉じた関係にする必要があります。{\cf2}はxmlでは指定していないフォントカラー指定をしています。これはカラーテーブル(最初の{\colortbl}部分)の3番目のカラー\red255\green0\blue255;を指定しています。また{\highlight5{\b\cf6 in cooperation with the brake pedal arm\b0\cf0}}部分もxml指定のない修飾ですが、背景色によるハイライト指定をしています。ハイライト指定は、文字色があらかじめ自分で定義可能でしたが、こちらは以下のようにrtfであらかじめ定められています。

背景色ハイライトの定義

```
highlight1 赤
highlight2 濃いピンク
highlight3 紺色
highlight4 緑色
highlight5 紺色
highlight6 アクア
highlight7 黄色
```

```
highlight8 淡い黄色
highlight9 白色
```

例2をエディターへコピーして、rtf拡張子をつけてファイル保存した後、MSワードでファイルを開くと次のように表示されます。

例3：rtfファイルのワード2010表示

1. A brake pedal assembly comprising:
a brake pedal arm having an initial position;
an adjustment subassembly configured to adjust the initial position;
a preload spring configured to provide a preload force to the brake pedal arm; and
a preload adjustment cam in cooperation with the brake pedal arm, the adjustment subassembly and the preload spring configured to change the preload force in response to a change in the initial position.

これは、xml公報の無限に可能なレンダリングの1つの形態といえます。

例2でhighlight5をhighlight7に変更するとハイライト色が紺色から黄色に変わります。

今回は、xmlとリッチテキストという2つのドキュメント翻訳にとって重要なファイル形式について例をもとに説明しました。次回はさらに、これらを記述する文字コードについて掘り下げてみたいと思います。

Writer Profile

本間 奨

Honma Susumu



富士電機株式会社で感光ドラムの研究開発を行った後、富士ゼロックス株式会社で、有機感光体の開発・生産に携わり、2000年から特許情報検索システムDocuPatの事業立ち上げ・推進をおこない、その後日本発明資料にて語順変換統計的機械翻訳エンジンを用いた英日・中日翻訳システムMT Plusを開発、特許庁中国実案抄録翻訳事業に採用され、現在100万件以上J-PlatPatで利用されている。

2015年2月に日本特許翻訳株式会社を設立、昨年9月から大手企業中心に外国公報の多言語高精度機械翻訳サービスを提供している。最近では、pdfやワードの科学技術文献をレイアウト通りに翻訳するドキュメント翻訳サービスを開始した。

翻訳を取りまく環境は様変わりしていきます。ときには戸惑うこともあるでしょう。でも、「翻訳と私」という関係は変わらないのではないのでしょうか。どんなに環境が変わろうとも、自分の軸がしっかりと根づいていたら、日々変わっていく風景にも心を感わされることはないかも知れません。初心に戻ったり、立ち止まったり、未来に思いを馳せたり、「翻訳のこと」、一緒に考えてみませんか? 「なぜ翻訳をするようになったのか」 今を見据えると、きっと未来が見えてきます。翻訳と皆さんのこと、教えてください。

コラムオーナー 矢能 千秋

Where there is a will, there is a way.

翻訳と私

わたしを導いたもの

職業としての出版翻訳にたずさわって16年。始まりは思いがけなくやってきて、勇んでこの世界に飛び込みましたが、いいことばかりではなくて、悔しくて苦しくて、このまま続けていていいのだろうかと思悩んだこともあって、じつは最近、出版翻訳者としての覚悟がぐらついていました。そんなときに、こちらへの寄稿という形で自分を振り返る機会をいただきました。

わたしの16年、こんなふうに始まりました——

始まり

出版翻訳に漠然とした憧れを持ちながら、在宅で日英産業翻訳をしたり、大学受験英語の添削指導の仕事をしてしていた2000年のある日のこと、いつものように何気なく地元の情報紙を読んでいた。その情報紙は、地元の中学生在がどうしたとか、どこそこの公園でイベントやりますとか、歌のサークルメンバー募集とか、生活記事がメインです。なのに、この日に限って、わたしの心を揺さぶる文字たちがそこに並んでいま

した。「翻訳の勉強をしませんか」——しかも鎌倉。近い! この機会を逃したら次はないと直感し、その場で電話をかけました。それが鎌倉翻訳勉強会と主宰の藤岡啓介先生との出会いです。東京外国語大学在学中には、河野一郎先生の翻訳ゼミで勉強し、当時中央大学の教授だった故・小山田義文先生の元で下訳をやっていました。しかし出版翻訳の実際に関しては知らないことばかり。藤岡先生にはそれを一から教わることになります。

勉強会には3年間お世話になり、先生には2冊の翻訳出版を紹介されました。そのうちの1冊は超短納期の仕事だったので、お話をいただいたとき一瞬迷いましたが、せっかくのご指名です、断るなどもったいない。清水の舞台から飛び降りる覚悟で受けて、1か月間よろしく、と家族には一方的に宣言しました。わたしの勢いに家族は何も言えなかったと思います。これが『ブラシド・ドミンゴ オペラ62役を語る』(アルファベータ、2001年)。もう1冊は、勉強会の食事の席で、同席していた編集者が「この本を訳したい人い

ますか」とみんなに声をかけた本です。問われた瞬間、わたしは「はい!」と大きな声でアピールして本を受け取りました。以前なら周りを見て遠慮がちに手を挙げたでしょうが、このときは訳したい気持ちが強かった。ちょっと恥ずかしいけれど、よくやった、と思います。それが『オードリー リアル・ストーリー』(アルファベータ、2003年)。

あの情報紙を見なければ藤岡先生とは会わず、出版翻訳者を名めることはできなかったでしょう。何かの力を感じないではいられません。

迷って悩んで

こうして出版翻訳者の道を歩き始めましたが、その先の道はデコボコして曲がりくねって、見通しがききませんでした。何か本を探そうにも道しるべはなく、当時関心があった(と思っていた)児童福祉の本を読んでみても、いまいちしっくりこない。その頃に書いたレジュメを読むと、その作品が良書で出版するだけの価値のあるものだったとしても、編集者の気持ちを動かすことにはないだろうな、と思うくらい覇気がありません。迷いがそのまま表れているかのようにです。ジャンルなり作家なり、無理矢理でも暫定的にでも攻める方向を決めていれば、いくぶんでも違ったとは思いますが。

そうした先の見えない中、藤岡先生が関わった「洋書の森」が日本出版クラブに設立され、そのボランティアスタッフになりました。また同じ頃、サン・フレアアカデミーを紹介されて翻訳勝ち抜き道場を開かせてもらいました。この二つはわたしの居場所となって今に至ります。翻訳仲間や友人を増やし、編集者やコーディネーター、名翻訳家と出会う機会を作ってくれる、大事な居場所です。

こう書いてくると、人脈が広がってよかったじゃないか、となるわけですが、肝心の出版翻訳の

道は相変わらず見通しが立ちません。知り合った人たちの伝手でリーディングを紹介してもらって、その縁で何冊か出版は叶いましたが、そこから次がなかなか……。2015年末発売の『千の顔をもつ英雄』の仕事が終わってから本探しもレジュメ書きも気分が乗らず、いつも頭の上に鬱陶しい雲がかかっている感じがした。

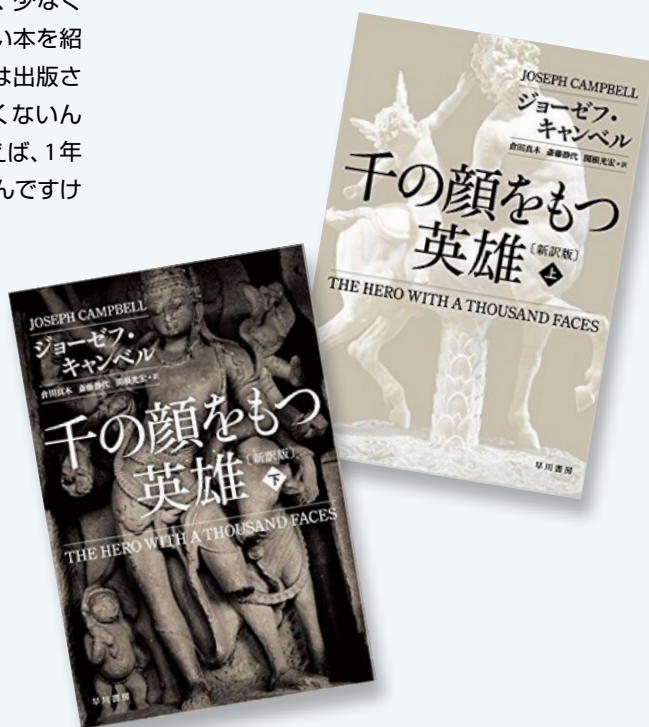
気持ちを新たに

そんなときにこのコラムの話をいただきました。文章を書くと、思考や感情が整理されると言います。実際書き始めたら、はい、自分の気持ちが見えてきました。プロフィールで書いた「点数は多くない」が、鬱陶しい雲の一番の原因でした。この点数では「出版翻訳者」と自信を持って言えない、とずっと気にしていたのです。でも訳書を並べて翻訳したときのことを思い出したら、「相性の良い本に恵まれた」ことに気づきました。自分で見つけた本のレジュメは通らないし、たくさんの訳書を出しているわけではないけれど、少なくとも好みの本、相性の良い本を紹介してもらい、いくつかは出版されている。これって、悪くないんじゃないか、と。(欲を言えば、1年に1冊か2冊、関わりたいんですけどね。)

ところで『千の顔をもつ英雄』には、召命に応じて冒険に出発する英雄たちがおおぜい登場し、その英雄たちをさまざまなアイテムが助け導きます。それは人だったりモノだったり出来事だったりするのですが、わたしの16年にとっては、あの情報紙とこのコラムです。この二つのお助けアイテムに導かれて今日があります。いただいた仕事をひとつずつ、丁寧にきちんと誠実に、形にする。それができれば大丈夫。そのうちにまたお助けアイテムが導いてくれるかもしれない。それくらいゆったりした気持ちで本を探し、人と会い、そしてスキルアップに励もうと思います。



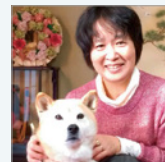
『バレエの世界へようこそ!』と
『写真で楽しむ究極のまちがい探し』
(どちらも河出書房新社、2015年)。
図版の多い本は楽しく仕事ができます。好きです。



『千の顔をもつ英雄』(早川書房、2015年)。
心身ともにタフな仕事でしたが、達成感を得られました。

Writer Profile

斎藤 静代
Saito Shizuyo



訳書は評伝、神話、児童書、大型本等。点数は多くないが、相性の良い本に恵まれた。翻訳者としての覚悟を決めさせたのは『オードリー リアル・ストーリー』(アルファベータ)。覚悟を新たにさせたのが『千の顔をもつ英雄』(早川書房)。サン・フレアアカデミーでは、翻訳勝ち抜き道場(2007年~2015年)の後、文芸翻訳通信添削実践講座を担当する。仕事で硬くなった頭と身体をほぐすのは、うちの三女、12歳の柴犬。
ブログ:2014年に始まった文芸翻訳通信添削実践講座の中で、『コーヒーブレイクde翻訳』と『ひとり演習』を月2回ずつ更新中。

http://e-honyakusquare.sunflare.com/saito_kouza/

MT
Machine
Translation

PE
Post-
editing

TM
Translation
Memory

翻訳テクノロジーを学ぶ

～ 翻訳メモリ編 その 1 ～

立見 みどり

立教大学 異文化コミュニケーション研究科 特任准教授

連載「翻訳テクノロジーを学ぶ」、第2回目の今回は翻訳メモリについてお話します。翻訳メモリの仕組みや使い方といった実践的なことについては『翻訳テクノロジーを学ぶ』ビデオ教材 (<http://www.apple-eye.com/ttedu>) の「翻訳メモリ編」をご覧ください。ここでは、翻訳者であり、翻訳テクノロジーの研究と翻訳教育にも携わる筆者の目から、翻訳メモリが翻訳という仕事をどのように変えてきたかを振り返り、今後わたしたちは翻訳メモリとどのように付き合っていくべきなのかを考えてみます。

翻訳メモリの起源

翻訳メモリというものはそもそもなぜ存在するようになったのでしょうか。これについてはビデオ教材の第5回でもお話していますが、「機械に翻訳者を支援させる」という発想自体は1960年代からありました。当時の米国ALPAC（自動言語処理諮問委員会）のレポートで、機械翻訳にはあまり見込みがないこと、そして機械に翻訳させるよりもむしろ人間の翻訳

者の仕事を機械に支援させるほうが現実的ではないかという考えが示されています。

人間と機械が共同で翻訳する

このような考えはMartin Kayによってさらに推し進められます。翻訳とは、高度な、時として芸術的な仕事ではあるけれど、その中には機械的にできてしまうルーチンワークもある。翻訳者をそのような仕事から解放すれば、翻訳者の仕事はより楽しくやりがいのあるものになり、翻訳作業の生産性も上がる、というわけです。

同時期にPeter Artherenが、現在の翻訳メモリに近いアイデアを示しました。彼は欧州委員会（EC）で翻訳されている文章には反復や引用が非常に多いことに注目し、それらを毎回翻訳するのは無駄であると考えました。これまでに翻訳した文を中央に保管しておき、いま翻訳しようとしている原文をその中で検索して、部分的または完全に一致する文があればその訳文を自動的に取り出す、というプログラムを考案したのです。

翻訳メモリの商品化

これらの考えが示されたのは1980年ごろですが、その後翻訳メモリが商品化され、実際にさまざまな翻訳の現場で使われるようになったのは1990年代に入ってからのことでした。

わたしはもともと、米国に本社を置くソフトウェア開発会社の日本支社でインハウスの英日翻訳者として働いていました。その後フリーランスの翻訳者として主にIT関連の翻訳の仕事を始めたのが1996年のことでした。そしてその翌年頃から、海外の翻訳ベンダーの求めに応じて翻訳メモリソフトを使い始めることになります。それを機に翻訳の仕事が大きく変わりました。

改訂版翻訳のストレス

第一に、マニュアルなどの改訂版を翻訳する作業が変わりました。ソフトウェアの画面、マニュアル、ヘルプなどの翻訳では、バージョンアップにともなう再翻訳の仕事が多くあります。翻訳メモリがない時代、再翻訳の作業は非常に面倒で退屈なものでした。バージョンが変わっても、マニュアルなどの原文は8割方以前と同じということも珍しくありません。クライアントからは用語や表現などを以前のバージョンとできるだけ揃えることを要求されるため、旧バージョンの原文を手作業で検索しては、似た部分があれば新しい原文と目作業で比較し、旧バージョンの日本語を必要に応じて編集する、という作業をひたすら繰り返す必要がありました。

流用部分についても翻訳料金は支払ってもらえるので贅沢な不満かも知れませんが、翻訳として受注した仕事の大半が、検索、切り貼り、比較、細かな編集作業の繰り返しで占められてしまうような時は、一体わたしの仕事は何なんだろう、と自問し、ひたすら単純作業に従事して一日が終わってしま

うことへのストレスを感じていました。

退屈な作業を自動化

これらの状況が、翻訳メモリの導入とともに一変したのです。検索、切り貼り、比較の繰り返しという、ストレスと肩こりをもたらす機械的で退屈な作業はソフトウェアが自動的に実行してくれ、翻訳者は本来の「翻訳」の仕事に専念できるようになりました。以前より仕事が「人間的になった」と感じましたし、自分の時間と能力を無駄にすることなく短時間で多くの仕事をこなせる生産性の高さが爽快でした。

チームワークの混乱

翻訳メモリの登場以前に翻訳者を悩ませていたのは、改訂版翻訳の問題だけではありません。大型プロジェクトでは複数のフリーランス翻訳者がチームを組んで遠隔共同作業を行うことがあります。複数の翻訳者がひとつのプロジェクトで作業する場合、翻訳者間での用語や表現の統一などに問題が生じます。

一定期間ごとに翻訳物を交換して互いにチェックし、用語や表現のズレなどをすり合わせる必要がありました。これは参加する翻訳者にとって大きな負担です。このため、チームのひとりが統一業務を担当し、翻訳者間の調整に多大な時間を費やすことも少なくありませんでした。

統一業務の大幅削減

複数の翻訳者間での訳文と訳語

の統一問題も、翻訳メモリを導入することで大半が解決しました。翻訳物そのものをいちいち互いにチェックしなくても、一日の仕事の終わりに翻訳メモリを交換するだけで、類似の原文に対して別の翻訳者が異なる翻訳を行ったケースがあれば自動的に検出されるようになったのです。統一のための業務はとても楽になり、翻訳者間での不統一が残ったまま納品してしまうケースも減りました。

翻訳者の記憶の引き出し

翻訳メモリの導入によって得られた利点は他にもありました。翻訳メモリを利用することで、翻訳者は、自分が行った翻訳を通じて蓄積した知識を資産として活用できるようになったのです。

原文に対する適切な訳文表現を見つけるのにとても苦労することがあります。次に同じような問題にぶつかったとき、以前どのように翻訳したかすべて覚えていられるわけではありません。翻訳メモリを活用すれば、それまでに行った翻訳を知識として蓄積して効率的に再利用できる。つまり自分の「記憶容量」を拡張できるようになったのです。

テクノロジーを味方にしたフリーランスビジネス

さらに、ビジネス面でも翻訳メモリが役に立ちました。日本の翻訳ベンダーの間で翻訳メモリが定着するまでにはさらに数年間のギャップがあったため、その間、翻訳メモリを活用できる翻訳者は、さまざまな面で有利でした。翻訳会社が要求するよりも短い納期で

仕事をこなし、流用分は値引きを提供でき、さらに旧版の原文と訳文から用語集や翻訳メモリを作成するなど、「提案型フリーランス翻訳者」として活躍できたのです。

フリーランスの翻訳者は、その事業形態上、クライアント、ベンダー、翻訳者という仕事の流れの下流に位置しているため、決定権が限られます。そのような環境にあって、テクノロジーを味方につけることで、スイスイと翻訳をこなし、プロジェクトを一部リードすることもできる。これは、新しいタイプの翻訳業だ、と思いました。

翻訳メモリの普及と状況の変化

しかしその後翻訳メモリが広く普及するにつれ、徐々に状況が変わりました。翻訳ベンダーが翻訳メモリを使うことが一般的になると、当然のことながら、テクノロジー活用の主導権は翻訳者より上流に位置するベンダーが握ることになります。そのこと自体は予想できた流れですが、それに付随して、翻訳メモリの導入以前よりも翻訳の仕事が「非人間的」なものになったように感じるようになりました。

いったんは翻訳業務の非人間的な部分から翻訳者を解放してくれたはずの翻訳メモリに、一体何が起こったのでしょうか。次回はこの点について考えてみます。

Writer Profile

立見 みどり
Tatsumi Midori



ソフトウェア開発会社でのインハウス翻訳者およびフリーランス翻訳者を経て、インベリアル・カレッジ・ロンドンにて「翻訳技術を利用した科学・技術・医学翻訳」修士課程修了 (MSc)。ダブリン・シティ大学にて博士課程修了 (PhD)。現在、立教大学 異文化コミュニケーション研究科 特任准教授。研究テーマは、機械翻訳の後編集に携わる翻訳者の作業と品質との相関性、コミュニティ後編集、機械翻訳のための制限言語、翻訳通訳教育のオンライン教材開発など。

参考文献

- ALPAC (1966) *LANGUAGE AND MACHINES: COMPUTERS IN TRANSLATION AND LINGUISTICS*. Division of Behavioral Sciences, National Academy of Sciences, National Research Council.
Kay, M. (1980) The proper place of men and machines in language translation. Palo Alto, CA: Xerox Palo Alto Research Center
Arthern, P. J. (1978) Machine translation and computerized terminology systems: a translator's viewpoint. *Translating and the Computer: proceedings of a seminar*, London, 14th November, 1978; ed. Barbara M. Snell (Amsterdam/New York/Oxford: North-Holland Publishing Company pp.77-108).



第64回JTF<ほんやく検定> 合格者発表

2016年1月23日(土)に実施された「第64回JTF ほんやく検定」の結果が発表されました。

実用レベル・英日翻訳

 **1級** (4名)
(非公開:1名)
儀保 千絵佳 (神奈川県)
團 陽子 (東京都)
笠川 梢 (京都府)

 **2級** (17名)
(非公開:2名)
菊地 耕平 (茨城県)
越智 文 (東京都)
糟谷 大輔 (奈良県)
甲斐 康一 (千葉県)
梅澤 真一 (新潟県)
山田 裕子 (石川県)
遊免 尚美 (三重県)
今瀬 佳介 (東京都)
市川 信子 (カナダ)
石井 雅博 (東京都)
小原 香織 (栃木県)
安藤 憲一郎 (東京都)
松下田 みゆき (愛知県)
徳田 亜希子 (東京都)
今泉 敦 (北海道)

 **3級** (53名)
(非公開:16名)
長田 宏子 (大阪府)
高橋 知廣 (千葉県)
滝澤 努 (神奈川県)
矢島 有記 (東京都)
君嶋 恒 (東京都)
佐藤 晴彦 (東京都)

川田 貴一郎 (大阪府)
武居 ちひろ (東京都)
石橋 雪江 (長崎県)
高橋 叡湖子 (京都府)
内田 淳一 (東京都)
黒川 耕大 (愛知県)
松原 海美 (シンガポール)
中村 亮 (東京都)
庄 公孝 (中国)
河村 裕紀 (香川県)
柏田 健 (大阪府)
辻 雅浩 (愛知県)
鈴木 美穂 (東京都)
平尾 扇 (ドイツ)
小西 常雄 (韓国)
高木 有美 (茨城県)
松井 信彦 (神奈川県)
山藤 卓実 (兵庫県)
小林 昭博 (山梨県)
森 正蔵 (愛知県)
勘場 友美 (東京都)
大恵 佐和子 (オーストラリア)
村松 美由紀 (東京都)
後藤 真司 (大阪府)
真栄里 孝也 (沖縄県)
井上 望 (東京都)
木下 考 (東京都)
佐藤 典宏 (福岡県)
槇 太郎 (東京都)
村越 由香 (神奈川県)
平田 光 (石川県)

実用レベル・日英翻訳

 **1級** (1名)
(非公開:1名)

 **2級** (8名)
(非公開:3名)
越智 文 (東京都)
滝澤 努 (神奈川県)
池田 悟 (京都府)
松原 海美 (シンガポール)
海野 由子 (神奈川県)

 **3級** (24名)
(非公開:6名)
ファーマン 健 (兵庫県)
マートネック アンドリュー (愛知県)
森 らい奈 (広島県)
青柳 美帆子 (東京都)
糟谷 大輔 (奈良県)
原田 吉晴 (大阪府)
ノッパネラ (ベルギー)
高橋 叡湖子 (京都府)
山田 裕子 (石川県)
今瀬 佳介 (東京都)
小西 常雄 (韓国)
高木 有美 (茨城県)
安藤 憲一郎 (東京都)
松本 恵 (静岡県)
佐藤 典宏 (福岡県)
津室 好江 (兵庫県)
今泉 敦 (北海道)
清水 直人 (東京都)



基礎レベル

👑 4級 (26名)

(非公開:16名)
日野 優希菜 (三重県)
佐藤 洋昭 (神奈川県)
中村 優子 (新潟県)
青木 真由子 (埼玉県)
清家 昌子 (埼玉県)
前田 尚子 (東京都)
原田 雅也 (愛知県)
渡邊 純子 (東京都)
塚田 悠紀 (愛知県)
河野 操 (栃木県)

👑 5級 (31名)

(非公開:20名)
日野 優希菜 (三重県)
中村 優子 (新潟県)
山川 憂也 (東京都)
豊野 重孝 (東京都)
小沢 麻里子 (茨城県)
浦田 裕子 (東京都)
小松 和暉 (千葉県)
三上 りおな (東京都)
石井 里奈 (東京都)
齋藤 良輔 (東京都)
山口 桃子 (フィリピン)
真栄里 孝也 (沖縄県)
米谷 壮司 (大阪府)
馬庭 明日己 (兵庫県)
遊免 尚美 (三重県)
納富 和己 (愛知県)
前田 愛美 (北海道)
柏村 めぐみ (神奈川県)
松浦 菜穂子 (岩手県)

瀧口 實 (北海道)
板倉 毬詠 (東京都)
増田 英莉 (静岡県)
神宮司 志穂 (東京都)
小原 健一 (埼玉県)
山口 朗 (東京都)
内田 三恵 (佐賀県)
安達 純子 (東京都)
和田 芳文 (岡山県)
相浦 隆祝 (東京都)
クラーク みどり (U.S.A)
荒川 恵美 (愛知県)
寺林 晴美 (U.S.A)
楠本 宏正 (神奈川県)
徳山 めぐみ (滋賀県)
上杉 あすか (滋賀県)
谷口 凜 (福岡県)
酒井 信 (東京都)
石毛 愛佳 (千葉県)
山口 翔子 (神奈川県)



第64回JTF<ほんやく検定> 1・2級合格者プロフィール

2016年1月23日(土)に実施されました第64回JTF<ほんやく検定>で、
1・2級に合格された方々のプロフィールをご紹介します。

項目は以下の4つです。

- ①得意な分野と言語は？
- ②現在のお仕事は？
- ③学歴・職歴と翻訳の実務経験は？
- ④翻訳依頼時の制約条件・希望条件は？

合格者への連絡先は、
「検定合格者リスト
(JTF会員専用サイト)」

http://www.jtf.jp/user/u_0101.do
をご覧ください。

笠川 梢 (かさかわ こすえ)

実用レベル・英日翻訳・医学・薬学1級合格
京都府在住



- ①医薬(臨床分野)。英日、日英とも可能。
- ②フリーランス翻訳者。
- ③立命館大学政策科学部卒(在学中に1年間の交換留学)。輸入建材の代理店でカタログやレターの翻訳などを含む貿易事務に従事した後、オーストラリアに半年留学。帰国後、派遣社員として国内製薬会社で新薬開発関係の英文事務や翻訳、翻訳チェックを担当しました。2005年にフリーランス翻訳者として独立し、現在は治験関連文書、副作用報告、添付文書、症例報告、学会抄録、医学論文などの英日・日英翻訳を行っています。英日・日英の受注割合はほぼ半々です。
- ④ご依頼をお待ちしております。製薬関連、特に治験関連の英日・日英翻訳を承ります(チェックもご相談ください)。

安藤 憲一郎 (あんどう けんいちろう)

実用レベル・英日翻訳・情報処理2級合格
東京都在住



- ①コンピュータ全般、特にソフトウェア開発。英日、日英とも可能。
- ②IT会社の品質保証部門に勤務。
- ③大学・大学院にて数学を専攻。現在勤務する会社では3年ほど、ソフトウェアマニュアルや仕様書、契約書等の翻訳をしています。2016年現在38歳。
- ④会社に勤務しているので、休日のみ翻訳に従事することが可能です。

今泉 敦 (いまいずみ あつし)

実用レベル・英日翻訳・医学・薬学2級合格
北海道



- ①ビジネス・経済分野、薬学分野(医学分野)、英日・日英の両方に対応。学校関連分野(教材等・英日)
- ②パートタイム・フリーランス翻訳者、講師(大学受験英語、高校受験国語(現代文))
- ③旧帝大(農学部卒)。医学薬学翻訳講座(都内通学)修了(2002~2005)、CNNインターナショナル(放送翻訳1993~1998)、会員企業向け情報サービス会社(都内)にて(パートタイム翻訳者2002、日英80%、英日20%)、欧米MBAビジネススクール留学対策予備校(都内)にて留学ガイドブックの英日翻訳(2002~2003、2004年刊行済)、都内翻訳会社にて(翻訳の校正者2004~2005)、在宅翻訳者(2003~現在)
- ④講師業等との兼ね合いで、週末に作業ができる小規模案件などからのご依頼が受けやすい状況です。

石井 雅博 (いしい まさひろ)

実用レベル・英日翻訳・情報処理2級合格
東京都在住



- ①コンピュータ全般、英日のみ。
- ②ローカリゼーション会社で、社内レビュー、翻訳者として勤務。
- ③大学はロシア語学科。COBOLプログラマ社員として8年間勤務後、翻訳学校でコンピュータ翻訳を勉強しながら、96年に講師の先生の紹介で現在の会社に入社。UI、ヘルプなどをレビュー、翻訳。フィードバック、トライアル(マーケティングなど)の仕組みを企画。英検1級。レビューに必要な知識として、Java、簿記3級、BATIC、Logicの資格を取得。
- ④会社に勤務しているので、週末のみ翻訳に従事することが可能です。



甲斐 康一 (かいこういち)

実用レベル・英日翻訳・情報処理2級合格

千葉県在住



①コンピューター ソフトウェアおよびハードウェア、通信ネットワーク、電力システム。

ICT(情報通信技術)インフラ系を得意にしております。
現在のところ英日のみ。

②フリーランス翻訳者

③大学で電気工学を専攻。その後、大手ICT会社にてさまざまな業務を経験してきました。在職中の翻訳経験は、通信システムの英日翻訳、電力課金システムの英日翻訳などがあります。海外出張経験、お客様へ英語でのサービス説明経験あり。2013年に会社を早期退職し、フリーランス翻訳者として従事しています。ITソフトウェア翻訳士1級合格。TOEIC 985点。

④翻訳会社からの依頼に応じることができます。英日翻訳の場合、1日に英語2000ワード程度可能です。土曜日曜休日にも仕事が可能です。Trados対応可。

糟谷 大輔 (かすや だいすけ)

実用レベル・英日翻訳・情報処理2級合格

奈良県在住



①IT 全般。特にソフトウェアの仕様書やその他技術文書、ビジネスレターやメールの日英および英日翻訳。

②電機メーカーでの社内翻訳者として、英日・日英翻訳に従事。近い将来にフリーの翻訳者になるため現在勉強中です。

③大学では英米文学を専攻。卒業後は米国の携帯電話評価部門にて、評価業務及び翻訳や現地作業者の教育を担当。2007年から現在の電機メーカーにて社内翻訳者として勤務しています。2016年現在36歳。

④会社に勤務しているので、休日のみ翻訳に従事することが可能です。将来はフリーの翻訳者となる予定です。

市川 信子 (いしかわ のぶこ)

実用レベル・英日翻訳・特許2級

カナダ在住



①特許全般、特に化学、バイオ。現在のところ英日のみですが日英も学習中です。

②翻訳会社に勤務していますが、今後フリーランス転向予定です。

③大学では英米文学を専攻、商社、ホテルでの勤務を経て2010年にカナダに渡り2012年より翻訳会社で英日特許翻訳に従事しています。

④翻訳会社からの依頼に応じることができます。当面のところ週3000ワード程度であれば対応可能です。

松原 海美 (まつばら うみ)

実用レベル・日英翻訳・科学技術2級合格

シンガポール在住



①科学技術分野、特に機械設計に関する英日・日英翻訳。

②医療・理化学・宇宙・バイオ等の機器や部品を扱う在シンガポールの日系企業営業部門での翻訳通訳。技術文書の他にもプレゼン資料、契約書、財務関連文書など可。

③学歴：米国ユタ州立大学にてエクササイズ・アンド・スポーツサイエンス専攻。

実務経験：プラズマTVソフトウェア開発、海外原子力プラント開発、海外プラント開発プロジェクトを含め、通算7年以上の技術翻訳(英日・日英)と通訳の経験あり。

④空き時間および休日のみ翻訳業務に対応させていただくことが可能です。目安として400ワード×8ページ/日 程度の翻訳量に対応可能です。

海野 由子 (うんの ゆうこ)

実用レベル・日英翻訳・医学・薬学2級

神奈川県在住



①医薬・薬学、医療機器全般。日英・英日とも可能です。

②CRO(開発業務受託機関)にて社内翻訳者として勤務。主に、薬事・承認申請書類、照会事項回答書、治験実施計画書、投稿論文、CSRなどの日英・英日翻訳。将来的にフリーランス翻訳者を目指しています。

③大学の文学部卒。在米7年。帰国後10年以上、情報通信分野の英日・日英翻訳業務に従事。翻訳会社勤務を経て、翻訳学校にて学習後、医薬分野での翻訳業務に5年間従事。

④現在のところ、休日の方の対応が可能です。

WysiWyg

WysiWyg は設立時より、品質をもっと大切に考え、科学的に正確な、そして、お客様の望む翻訳を提供し続けてきました。

WysiWyg はこれから新しい翻訳の形にも挑戦してまいります。

まずは、新しい形の翻訳教室から…
→弊社 HP をご覧ください。

株式会社ウィズウィグ

<http://www.wysiwyg.co.jp/>

〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-21-2 京橋第九長岡ビル6階
TEL 03-5566-1669 FAX 03-5566-4808



WORLD BUSINESS PARTNER

人・モノ・ビジネスを、世界と結ぶお手伝い

ida はアウトバウンド&インバウンドのビジネスを、多言語翻訳をベースに貢献しています。

- 「わかりやすい世界標準の英語」をベースに多言語展開の販促ツールから観光用のパンフの仕上げまで一元管理でスムーズに対応します。
- グローバル企業様向けに、多言語 CMS 活用のWEB サイト構築をご提案、運営を行います。
- 翻訳資産を最大活用できる最新の支援ツールを運用。多様な媒体でも用語統一されます。

アイ・ディー・エー株式会社

<http://www.idanet.co.jp/>

〒530-0051 大阪市北区太融寺町1-17
TEL 06-6360-6300 FAX 06-6360-6303



株式会社 インターグループ
インタースクール

『言葉のプロフェッショナル集団』
インターグループは、50年にわたる信頼と実績を持つ異文化コミュニケーションのリーディングカンパニーです。

- フリーランス翻訳者募集
幾多の経験が培った“伝える能力と心”で、質の高い作品を私達と共に作り出して下さる方
- インタースクール 受講生募集
翻訳・通訳なら専門英語力が武器になる。卒業後のお仕事紹介まで。

是非弊社 HP をご覧ください。

株式会社インターグループ

<http://www.intergroup.co.jp/>

〒105-0001 東京都港区虎ノ門二丁目2番5号 共同通信会館4F
TEL 03-5549-6907 FAX 03-5549-3207



◆フリーランス翻訳者常時募集中◆

知財コーポレーションは特許翻訳専門の翻訳会社です。特許翻訳は専門性が高い仕事であるため、フリーランス翻訳者の皆様に安心して取り組んでいただけるよう、当社では顧客の仕様に関する説明会や、翻訳チェック結果のフィードバックなどを行っています。より良い翻訳をするためには、翻訳者の皆様・顧客・当社が近い距離でコミュニケーションを取ることが大切と考えており、そうした環境を整えています。知的財産の世界で人材は常に求められています。ご応募をお待ちしています。

株式会社 知財コーポレーション

<http://www.chizai.jp/>

〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-10-1 日土地西新宿ビル7階
TEL 03-5909-1181 FAX 03-5909-1183



技術翻訳に特化したジェスコーポレーションは

ひとりひとりが得意の専門分野を持ち

「原文の正確な理解」を心がけています。

●取り扱い言語●

英語、中国語、韓国語、ベトナム語、タイ語
インドネシア語、ミャンマー語、モンゴル語
ウルドゥー語、ベンガル語、アラビア語
ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語
その他アジア言語、その他ヨーロッパ言語

株式会社 ジェスコーポレーション

<http://www.jescorp.co.jp/>

〒220-0003 横浜市西区楠町4-7 ニッセイ横浜楠町ビル6F
TEL 045-313-3721 FAX 045-314-3765



サン・フレア アカデミー

サン・フレア アカデミーは、翻訳会社サン・フレアが母体の翻訳スクール。創業約40年、50以上の言語とあらゆる産業分野に対応する翻訳サービスで1000社以上の顧客から高い評価を得ているサン・フレアにおいて高品質の翻訳を提供しているのは登録翻訳者。その約8割がサン・フレア アカデミーから巣立った人材です。サン・フレア アカデミーは翻訳実務での豊富なノウハウと現場のニーズを活かし、次世代の産業翻訳業界を担う優秀な翻訳者の養成に力を注いでいます。

(株)サン・フレア/サン・フレア アカデミー

<http://www.sunflare.com/academy/>

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-7 新宿ヒロセビル2階
TEL 03-6675-3965 FAX 03-6675-3968



ベストな品質を提供するために大切なことは

お客様の要件を翻訳者の皆様に正しく伝え、必要な情報を皆様と迅速・的確に共有することだと考えています。お客様のフィードバックも適時に還元します。US、欧州、中国、韓国をはじめとする当社の海外拠点とも歩調を合わせ、時差を利用し世界のあらゆる言語に対応します。十印を支えるのは皆さまの協力をおいて他にはありません。プラスのしるし、十印は業界のパイオニアです。ご応募をお待ちしています。

株式会社 十印

<http://www.to-in.com/ja/>

〒141-0031 東京都品川区西五反田7-25-5
TEL 03-5759-4353 FAX 03-5759-4376



翻訳センターグループは、日本最大規模を誇る外国語サービスの総合サプライヤーです。

- 「世界の語学サービス会社ランキング」
4年連続アジア第1位
- 2006年、産業翻訳業界で初の株式上場
(証券コード2483)
- 専門性の高い翻訳を提供
(特許、医薬、工業ローカライズ、金融法務)
- 翻訳以外の外国語サービスも展開
(通訳、派遣、コンベンション、MW、
外国特許出願支援、多言語コールセンター)

株式会社 翻訳センター

<http://www.honyakuctr.com/>

〒541-0056 大阪市中央区久太郎町4丁目1番3号 大阪御堂筋ビル13階
TEL 06-6282-5010 FAX 06-6282-5018



翻訳者・校正者・チェッカーを大募集!
スピード翻訳 by GMO の翻訳者に
ご登録いただくと…

- 24時間365日、ウェブから翻訳案件を受注できます
- 空き時間を有効活用できる小規模の案件から、翻訳に数日をする中規模案件まで積極的に受注できます
- 手紙や一般的なビジネス文書から、医療、契約書、論文までさまざまなご依頼案件が受注できます

GMOスピード翻訳株式会社

<https://www.quicktranslate.com/>

〒203-0051 東京都渋谷区桜丘町26-1 セリアンタワー10F
TEL 03-6415-7189 FAX 03-6674-2482

38言語翻訳 Trans-Pro

翻訳プロ (trans-Pro.) は 38 言語対応クラウド型のオンライン翻訳サービスです。お客様評価や指名・お気に入り登録等、お客様の利便性に加え高品質な翻訳提供のため翻訳者皆様のことも考えて設計されています。

●実績数・評価が上がると翻訳料金 UP!

●指名をもらえると更に翻訳料金 UP!

あなたもここで、チャレンジしませんか?

→翻訳プロ登録 <https://www.trans-pro.net/>

(株)ビーコスでは 162 言語 168 ヶ国の登録者と

翻訳・通訳以外にも様々なサービスを提供中!

→その他スタッフ登録 <http://staff.hiwork.jp/>

株式会社ビーコス/翻訳プロ (trans-Pro.)

<http://www.b-cause.co.jp/>

〒105-0013 東京都港区浜松町2-1-3 第二森ビル4階

TEL 03-5733-4264 FAX 03-3433-3320

MEMSOURCE

「最もユーザーフレンドリーな CAT ツール」
「翻訳メモリと用語集の共有、
カスタマイズ可能な自動通知メールのおかげで
我々の時間はかなり短縮されました」
「翻訳の生産性が 50%向上しただけでなく
コストが 20%削減しました。」

Memsource (メムソース) をご愛用頂いている
お客様から、こんなお声を頂戴しています。
業務効率化のためのクラウド型翻訳支援ツール
日本語デモ・資料請求はこちらまで
japan@memsource.com

Memsource

<https://www.memsource.com/ja>

Memsource Technologies, Spalena 51,
110 00 Prague, Czech Republic

ASCA

株式会社 アスカコーポレーション

— ASCA の「翻訳者育成」の取り組み —
ASCA は医薬/バイオ分野に特化したドキュメントサービスを提供しています。高い専門性を持つ翻訳者の育成に力を注いでいます。

●オンライン講座「ASCA Academy」

登録翻訳者を対象としたセミナーを月 1 回以上の頻度で実施

●ミーティングの実施

大規模案件のキックオフミーティングなどを随時実施。翻訳者同士の情報交換も支援

●フィードバックシステム

品質管理工程の結果を翻訳者と共有

株式会社アスカコーポレーション

<http://www.asca-co.com/>

〒541-0046 大阪府中央区平野町1-8-13 平野町八千代ビル9F

TEL 06-6202-6272 FAX 06-6202-6271

翻訳業界 インデックス

翻訳業界をリードする

企業をご紹介します!

翻訳者をはじめ、

翻訳者を目指している方、

翻訳の依頼をお考えの方など

翻訳会社やスクールを

お探しの方は

このインデックスを

是非ご活用ください。

掲載会社募集中!

募集

広告募集のお知らせ

翻訳者、翻訳会社を対象とする広告や特集記事に関連する広告を随時募集しています。詳しくはJTF事務局までお問い合わせください。

JTF事務局 : TEL 03-6228-6607

E-mail info@jtf.jp

Next Issue

翻訳の未来を考える

次号
予告

#285 2016 09/10 JOURNAL

2016年9月9日発行予定

※発行日や内容は変更になる可能性があります。

巻頭特集「通訳翻訳の業界団体」(仮題)

通訳翻訳業界には日本翻訳連盟以外にもたくさんの団体があり、それぞれ特色ある活動をおこなっています。

次号の特集では、日本国内に拠点があり通訳翻訳とかかわりのある業界団体や学会などをまとめてご紹介します。

Editor's note

天下統一とネットワーキング

今月号で特集したLocWorldは世界と出会う場ですが、国内に目を転じたとき、同じ「翻訳」という営みにかかわっていても立場や役割が違いくつものグループに「業界」が細分化されており、異なるグループの間にはへだたりが存在するという現実があります。

この業界分割の構造も、昔は今よりシンプルでした。産業翻訳については依頼者と翻訳者、および両者を仲介する翻訳会社があり、その利害は対立しがちなので意識して相互理解と交流をはかる必要があること。日本では1980年代に機械翻訳が業界として誕生したけれど、機械翻訳業界と産業翻訳業界はおおむね別世界であり、人的交流も一部の例外をのぞいてあまりなかったこと。海外では二十年以上前から通訳翻訳が大学や大学院で教育研究される学問の一分野として認知されてきたが日本はだいぶ遅れており、通訳翻訳は徒弟制度で師匠について学ぶのが一般的だったこと。以上の三点をおさえておけば業界構造は把握できました。

しかし今や、状況は変わりました。統計的機械翻訳の台頭は別世界であった機械翻訳業界と産業翻訳業界を技術的必要性によって結びつけつつあり、日本でも通訳翻訳学が学問として認知されるとともに職業教育として通訳翻訳を大学や大学院で学ぶ時代が始まりました。これらの変化の結果、従来の依頼者・翻訳者・仲介者の三者に、新たに(機械翻訳の)開発者・(通訳翻訳学の)研究者・(大学や大学院の)教育者を加えた六者の相互理解と交流を意識的にはかることが、いま求められています。

そのためにこれら6つのグループをひとつの業界団体に「天下統一」とするという考え方もありえますが、私としては6つのグループが互いに出会う「ネットワーキング」の場を設けるほうが実現しやすいのかなと思います。

編集長 河野 弘毅
Kawano Hiroki

JTF JOURNAL

日本翻訳ジャーナル

2016年7月/8月号 #284

- 発行 ● 2016年7月8日
- 発行人 ● 東 郁男(会長)
- 編集人 ● 河野 弘毅
- 発行所 ● 一般社団法人 日本翻訳連盟
〒104-0031 東京都中央区京橋3-9-2 宝国ビル7F
TEL 03-6228-6607 FAX 03-6228-6604
info@jtf.jp http://www.jtf.jp/
- 企画・編集 ● 広報委員会
- 表紙撮影 ● 世良 武史
- デザイン ● 中村 ヒロユキ(Charlie's HOUSE)
- 印刷 ● 株式会社 プリントバック





memoQ サポートが平日は24時間体制になりました！
いつでも迅速にあなたのお悩みに対応いたします！

“ memoQは
本当にプロフェッショナルな
翻訳ソリューションを
クライアントに提供できます。
サーバーバージョンは
プロジェクトの透明性が得られ
ワークフローのコントロールが
容易になります。
またリソースの共有も
難なくできるようになります。”

Edimart (ハンガリー), 社長, Márta Balázs

業務が拡大していますか？
30日間無料のクラウドサーバーソリューション
を試し、気に入れば月契約してください！
memoq.com/memoq-cloud-server

飛躍的な業務拡大には？
30日間無料のサーバートライアルを
お試しください！
memoq.com/memoq-server

sales@kilgray.comにご相談ください。



登録翻訳者の皆様に無料で使ってもらえます
最新の翻訳メモリ・用語集・作業進捗を共有できます

～まずは30日間無料でお試ください～
www.memsources.com/ja/pricing

日本語マニュアル・ブログ
blog.memsources.com/ja/

E-mail: japan@memsource.com TEL: 03-4360-5563

日本オフィス：〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂1-12-1 渋谷マークシティ W22階

本社：Spalena 51, 110 00 Prague, Czech Republic (チェコ共和国プラハ)
Memsource

「翻訳業界インデックス」 掲載募集のお知らせ

「翻訳業界インデックス」は、
テキストベースの広告スペースです。
御社の強みを「コトバ」でアピール。
業界でのステータスアップに
ご活用ください!

販売価格

1年6号分のご契約になります。

1年契約 6万円 (税別)
(1号あたり1万円)

販売区画は、限定**36社**のみです。
なくなり次第終了とさせていただきます。
お早めにお申込みください。

お申込み、ご不明な点は?

貴社名
ご担当者部署/役職名
ご担当者氏名
電話番号

を明記の上、下記まで
お問い合わせください!

E-mail: **info@jtf.jp**
(JTF 事務局宛)

サンプル見本 ➡

ロゴ: **ai** または **eps** ファイル
(高さ 10mm 以内で使用します)

必要なのは
ロゴデータとPR文のみ。
広告の制作費が不要なので
リーズナブルです。

PR文: 1行 21文字 × 12行以内

御社名
ウェブサイトURL
住所
電話、ファックス番号

※デザイン、レイアウトの指示はできません。

一般社団法人
日本翻訳連盟
Japan Translation Federation

JTFは翻訳に関わる企業、団体、個人の会員からなる産業翻訳の業界団体です。

MISSION

- JTFは産業翻訳の業界団体として、常に時代の変化と潮流を読み、業界の健全な成長と発展に寄与します。
- JTFは会員間の連携を促し、信頼あるプロフェッショナルの育成と向上を目指します。
- JTFは急速に進むグローバル化の中で、会員のビジネスチャンスの拡大とJTFブランドの向上に努めます。

一般社団法人 日本翻訳連盟
<http://www.jtf.jp/>

〒104-0031 東京都中央区京橋 3-9-2 宝国ビル 7F
TEL. 03-6228-6607 FAX. 03-6228-6604